
トリッパーな父ちゃんは (ポケモン二次)

ラムーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリッパーな父ちゃんは（ポケモン一次）

【Zコード】

Z93140

【作者名】

ラムーラ

【あらすじ】

プロポケモントレーナーに憧れる短パン小僧のサトシ君。

憧れのポケモンマスターになるべく、毎日毎日特訓と言つ名田で遊びにでかけては擦り傷ときり傷と仲間の数を増やしています。

そんなどこにでもいるような、けれどちょっとやんちゃなことで評判の、短パンと絆創膏の似合ひジャリボーイな彼にはこれまた、どこでモーいるような釣り人のお父さんが居ました。

けれど、お父さんはサトシ君には内緒の秘密があつたのです。

このお話は息子に英才教育を施したり、息子に気付かれないようこ
陰ながら応援したり支えたり奮闘したりするトリッパーなお父さん
のお話です。
多分。

鳥子とハイキング（前書き）

アニメやマンガやゲームとは微妙に異なる世界です。簡単に表記すると現実 ポケモンになります。

なんとなくでも良いので読んでくださると嬉しいです。

息子と「イギング

「コイキング」というポケモンがいる。

「はねるー、はねるー、はねるー」ビターンシ、ビターンシ、ビターンシ

数多く存在するポケモンの中でも知らない人は居ないほどの知名度を誇るポケモンだ。

しかし、一般に好ましい理由で知られているわけではない。

別にフラッシュで社会現象を引き起こしたとか、そういうったことでもない。

第一それは“あそちの世界”での話であつて、こゝちで実際に生きている人たちからすればまつたく関係ないどころか知りもしない話である。

「はねるひ！ はねるひ！ はつねるー！ はあねえるうー！」
ビチツ、ビチヤツ、ビチチツ

初登場はポケットモンスター赤緑。

最初にもらえる三匹のポケモンのうちの一匹、ゼニガメを除けば序盤の難関、オツキヤマ前で唯一入手できる水タイプのポケモンだった。

きっと数少ないトレーナー戦で稼いだなしの500円と引き換えに、期待に胸膨らませて手に入れた人も少なくはないんじゃないだろうか。

そして、期待はずれの性能にがっかりした人も同じくらいいると
思う。

なんせ俺がそだつたからして。

ゲームではコイン換金を除いて、直接現金で買える唯一の、ある意味珍しいポケモンだったが。

「まだだよ、まだはねるんだ！」 ビチッビチッ

個人的には思い入れのあるヒンズードなのだが、まあ、そんなゲームの話もこっちじや関係ない。

ただ、あちらでもこちらでも共通して知られている有名なコイキングの特徴がある。

「もつひとつー！ はねるー！」 ビチ、ビチ、……ビチ、……ビ
チヤ

それはもう文句のつけようがないほどに有名で、過去にどつかの小学校の入試問題に一般常識として出題されたほどだとか。当然、こいつの世界の話なのだが。

「よし、こまだ！ ちからこつぱー、はねて、わるあがきー！」

ビチビチビチビチビチビチビチ

バチンバチンッバチバチバチ

「ええつー？ むこつもわるあがきつー？」

……ピク……ピ、

ク

それは赤いボディに金の冠そつくりの體ビレに、どこか間の抜けた面構えという見た目と……。

「「、「コイキング大丈夫！？……。」、「うあああとひりやあああん、「コイキングが死んじゃったああ！」

今正是ひりやの息子の田の田の前で白田をひん剥いて体現してくれた、名実ともに“最弱の雑魚ポケモン”といつ悲しそういふ評価である。

ゲームではレベル15になるまで『はねる』以外の技をいつさこ覚えず、肝心のはねるには攻撃力が皆無。それでいて技マシンで覚える技も何一つない。

レベル15でたいあたりを覚えるまで攻撃手段がはねるのPPを使い切つてやつと繰り出せる『わるあがき』のみ。

わるあがきは使用できる技が何一つ無いときにポケモンが苦し紛れに放つ技で、そこそこ威力の技だ。

しかし、それに見合はないほどのダメージが自分にも返ってきてしまう。

元々、コイキングの種族としての強さもすばやさとほりきり以外は最低レベル。わるあがきで敵を倒す前に反動ダメージで自滅する方が早かつたりする。

ぼうきょもそれほど高いわけではないので敵に倒されてしまうもうがもつと早いのは言わざもがな。

またレベル15でやつと覚えるたいあたりも攻撃技としては最低限の威力しか持つておらず、そのうえコイキングが水タイプなのに対し、ノーマル技とタイプ不一致で威力が増えない。

とにかく、同レベルの他のポケモンと比較すると悲しいほどに弱い。

レベル差が10程度あつたとしても勝てないことの方が多いと思う。

正に最弱の召をほしこままにするポケモンなのだ。

そんなポケモンを最初のポケモンとして息子にあげたのは間違いだつたかと、初めてのポケモンバトルが無残な結果に終わった息子の姿を見て、思ってきた。

……いや、まさか、同じコイキング相手に負けるとは思わなかつたのだ。

ボコボコにされた自分のコイキングをボールに戻し、泣きべそをきながら私のもとへ駆け寄つてくる息子。

見事に短パン小僧ルックな我が最愛の息子は今日5歳になつたばかり。

たまに小生意気なクソガキつぶりを発揮し、自分の息子ながら誰に似たのかと思うときも多々あるが……基本的には素直でよい子だと思つ。特に今みたいに困つたときには泣きついてくれるのはちょっと可愛いところじゃないかと。

広げた腕に飛び込んでくる息子を軽々と抱き上げながら、とりあえず励ましておく。

「大丈夫だ。コイキングはダメージを受けすぎて、ひんし状態になつただけだから。とりあえずモンスター・ボールに戻しなさい」

若干の涙声でうんと返事をすると息子はコイキングをボールに戻した。ボールの中心から放たれた赤い光線がコイキングにぶつかつて瞬時に包み込みボールの中へと戻つていく。

「よし。それじゃ、絶対にコイキングをボールから出さずにポケモンセンターへ連れて行くんだ。そうすればちゃんと元気になるよ」

「ねえ、おとうさんひんしつてなに？」

「ああ。ポケモンは戦えないくらい痛い目に会うとひんしつて一種の仮死状態になる習性があるのさ」

「か、し？」

「あー……。わかりやすく言つと死んだふり、かな?」「えー、それってなんだかずるい」

死ぬ一歩手前、動けないほどの傷を負つて防衛本能が自動で行う死んだふりを、うちの子はすること申すか。この年でなんといつ鬼畜つぱり。誰に似た。

「でもひんしになつたら今みたいにすぐにボールに入れてあげないとダメだぞ。ひんしのままボールに戻さないと死んじゃうことあるからな」

ボールはポケモンの体調をほぼそのまで保持しておいてくれる。ひんしのポケモンがいたらとりあえずボールに入れるのは世間の常識だ。今のうちに教えておこう。

なんにせよまずはポケモンセンターへ向かわねば。息子の手をひいて歩き出す。

「しかし、まさか同じコイキング相手でも勝てないとは……レベル差か? それとも固体値? いや、両方か? 相手がたいあたりを覚えてないここまで確認して戦つたのにこれじや、先が思いやれるぞ……。これからさらに低レベルのコイキングを探せつて言つのか?」

少なくとも今日ポケモントレーナーテービューしたばかりのうちの息子が一人でこの「コイキングをレベル20まで育てきれるとは到底思えなかつた。

息子に聞こえないようにひつたりため息をつべ。

「……ねえ、とつちやん? 本当にこつがあのギャラドスになるの? すつじく弱いじやん」

俺が息子に初めてのポケモンとして「トイキングを『与えたのは何も俺が鬼畜だからではない。

息子がそう望んだのだ。

息子は今、他のお子様どもの例に漏れず、毎週水曜と日曜の夕方にテレビで放送しているポケモンリーグの中継にはまつている。

そこで息子が一番好きなチームの一一番好きな選手がギャラドスを使っていたらしく、それに憧れたようだ。

そろそろ誕生日だけど、何が欲しい? と訊ねたところ「ギャラドス!」と元気よくかえされてしまったのだ。

私は一社会人があるのでギャラドスを捕まえにいく時間などなく、何よりもたまの休日を息子をおいて遠出するなど、遠慮したい」とことのうえない。

息子に見せたことはないが、私もギャラドスを持っている。持っているがそいつを息子にあげたところを言つことを聞かないだろう。他人から貰つたポケモンはレベルが高すぎると言つ事を聞かないのだ。

言つ事を聞かせる方法もあるにはあるが、今日ポケモントレーナーを始めたばかりのうちの息子では無理だし。

そんなわけでギャラドスの進化前であるトイキングをプレゼントすることにした。

趣味を兼ねた釣りでちょうど珍しい色違いが手に入ったところだったのも幸いした。

捕まえたときにマスター登録をしていなかつたので息子のポケモンとしていちから育てられるのもよかったです。

「本当だぞ? 「トイキングは進化するとギャラドスになる」

「でも、ともだちに話したら、みんなそんなわけないって言つてたし……」

「あー、そうなあ。」うちじゅああんまり世間には知られてないっぽ

いんだよな

ゲームではコイキングがレベル20になるとギャラドスに進化した。

ギャラドスはそれまでのコイキングの脆弱つぱりとは比べ物にならないほど強力なポケモンだ。電気タイプにめっぽう弱いと致命的な弱点がつたりはするものの使える技には強力なものが多く、能力も総じて高め、見た目もその強さを表すかのよう厳つくなる。

変わるのは能力や見た目だけではない。

気性も荒いものになり、まれに怒り狂つて町や村が壊滅させられたとニュースになることがあるほどだ。

とにもかくにも進化前とは印象ががらりと変わる。

そのためか、世の中にはギャラドスとコイキングが結びつかない人が多いらしかった。

ま、確かに、どこにでも吐いて捨てるほどいる最弱のポケモンと滅多に出くわすことの無い悪名高いポケモンとの接点なんて一見どこにもないからな。

実際、研究者や学者、ジムリーダーやエリートトレーナーなどの実力者の間ではそれなりに知られてはいるものの、一般人や駆け出しのトレーナーでこの事実を知っている人間はあまりいなかつた。一部の漁師や釣り人が昔からの噂話として知つてたりしたけど。

「ま、大丈夫だよ。俺はコイキングがギャラドスに進化するのをこの田で見たからね。ちゃんと面倒見て強く育てればいつか進化するわ」

「うー、とつちやんがそういうな」

私は意外に息子から信頼されているらしい。嬉しいことを入つてくれたお礼に頭をなでてやる。

「やーめーてー」……なんか嫌がられた。

「ま、世にも珍しい金色のコイキングなんだ。もしかすると進化したら普通のギャラドスよりももっと珍しくて強いのになるかもしないぞ？」

具体的には赤いのである。三倍速いかどうかは知らんが。

「ほんと! ? ワタルのより! ?」

「あー、お前の頑張りしだいだろ! うな」

「ぼく、がんばる!」

むふー、と鼻息荒くガツツポーズする息子を見ていると微笑まい気持ちになる。

私も自然と笑顔になっていた。

「ま、まずは怪我を治してやるとこからだな
「あ、そうだった……」

息子は先の大敗を思い返したのか、一気にしょぼくれてしまった。なんとも忙しことだ。

「ま、しばらくは俺もレベル上げに付き合つてやるから、もう落ち込むな」
「うん……」

その後、元気を取り戻したコイキングを引き取った息子は再度コイキングに挑戦したが再び返り討ちにあつていた。

親の目もあるとは思うが息子はトレーナーとして才能があるほうだと思う。けれども、それが今すぐ開花するわけでもなく。

とにかく、泣きじゃくれる顔つきを浮かべたままの立花が、休田だつた。

息子とハイキング（後書き）

初めまして。どうぞよろしくお願ひします。
……しかし、初投稿がポケモンになるとは思いもしませんでした。

主人公は『とうちやん』です。俗に言つてリッパー。

作品補足

主人公は息子の誕生日のために有給使いました。
見た目は『釣り人』です。
ただし、手持ちは全力厨仕様予定。
とびはねるについて主人公はあてが無いので最初から考慮してません。

作者はポケモンをしつかり追いかけていたのは金と銀までです。
一応FRはやりましたがリメイクですし。色々調べながら書いてますが、おかしいところや疑問なところはどんどん指摘していただけると助かります。

息子と「コイキング」 2

マカラタウン　自宅前

今日は日曜日。会社も休みなので息子の特訓に付き合つてやるうと思つていたのだが、緊急で呼び出しの電話がかかってきてしまつた。

「それじゃあ行つてくるけど、お姉さんに迷惑かけるんじゃないぞ」「わかつてゐよ」

大変申し訳ないとは思いつつ、お隣の家に息子を預けていく。平日ならば息子も学校があるので一人にはならないのだが今日みたいに休日出勤が決まつてしまつと家に一人なつてしまつ。

一人でお留守番が出来ない年と言うわけでもないが、今回のように出来る限りお隣のオーキドさんの家に預かつてもらつていた。

「シゲル君とも喧嘩せずに仲良くするんだぞ」

「うん」

「ちゃんと宿題もやるんだぞ」

「うん」

「あと草むらにも入つちゃダメだからな？　絶対一人で行くなよ？」

息子は最近、コイキングがたいあたりを覚えたことで少し調子に乗つているところがある。

なによりも大事な安全性と、ついでの努力値計算を考慮してコイキング以外のモンスターと戦わないように言い含めてあるのだが。

息子は他のモンスターで腕試しがしたくてたまらないようなんだ。

今までバトルの際は必ず私がそばにいるようにしていただが、ひょ

つとした拍子に一人で行つてしまふやうで……不安だ。

「もー、わかつてゐるつてば!」

「ほんとにわかつてゐるのか? 約束破つたらドククラゲの刑だぞ?」

「う、わ、わかつてゐよ」

「さうか。それならいいんだ」

ドククラゲの刑は言う事を聞かせたいときの最終手段である。この言葉を出せばそれだけで息子は震え上がり素直になつてくれる。……便利ではあるが息子のトラウマとなりやうなので使いすぎないようになければ。

「おーい、サトシー。ゲームじょりぱー

家の奥のほうからシゲル君の声が聞こえてくる。

「」の辺でゲーム機を持つている子供は家の子とシゲル君だけで、シゲル君はまともにゲームの相手が出来るやうちの子をとても気に入つてゐる。

息子は息子で友達が少ないから同じ年でよくしてくれるシゲル君にべつたりである。

ときどき他愛も無い理由で喧嘩していくこともあるが、まあ、仲が良い証拠だらう。

「ちよつとまつてー、こま行くかー。じやあお父さんつてちよ
しゃい

「ああ、こつてくる。それじゃあナナミやさ。いつもすみません。
うちのサトシをよろしくお願ひします」

「いえいえ気になさらないで。」どちらもたびたびお世話をなつてしますし、シゲルも同い年の友達が出来て喜んでいます。サトシ君のこ

とは任せてください。シゲルよりずっと素直で良い子ですから大丈夫ですよ」

「いえ、あー、ほんと助かります」

「うふふ、いざとなつたらお爺様も研究所にいらっしゃいますしじ」

心配なさいず。ハマサキさんもお仕事がんばってくださいね」

オーキド博士のお孫さんのナナミさんはポケモントーマーを目指す女子大生。とても優しく見た目と中身の持ち主だが、それ以上に共働きの両親の代わりに弟の面倒を見ているしつかりした娘さんだ。去年、息子の小学校進学に合わせてクチバから引っ越ししてきた私達親子は彼女を始めとするオーキド一家に大変お世話になつていて。オーキド博士とはタマムシ大学に在籍していた以前からの知り合いだったが、まさかここまで付き合いが深くなるとは思つてもみなかつた。

ナナミさんには華盛りのお年頃であるにも関わらず休日を息子のよつなジャリガキの相手で潰させてしまうことに申し訳ない気持ちになる。

だが、このタウンで新参者の俺達に他に頼れるところがないのも事実だった。

「ええ、もちろん。うちの子が頑張つてるので、私も負けてられませんからね」

最初こそ泣きべそかきながらコイキングをひたすらはねさせていた息子。それでもめげずに毎日最低5時間、欠かさずコイキングのレベル上げを続けている。

今ではボロの釣竿を持つて「早く行こうよ父ちゃん」と私を帰りを急かすほどだ。

朝は6時には起きて学校に行く準備を済まし、7時ごろから8時の

登校時間まで大体一時間ほど近所の水場で特訓と言づけのレベル上げ。

仕事が忙しくない場合、私の帰宅時刻はだいたい18時ごろなのでそこから9時過ぎまで。ふたたび近所の水場でコイキング相手に特訓。

ちなみに息子は10時には寝てしまため活動時間の大半をコイキングの、ひいてはトレーナーとしての特訓に費やしているといえる。それだけ時間をかけても一日に倒せるコイキングの数は良くて3匹程度だったというのが恐ろしい。

ひたすらコイキングをはねさせるだけの作業はひどく退屈なものだつたが、それでもめげずに2年も続けてきたのだ。

我が息子ながら根性のある子だ。

そんな息子だからコイキングがたいあたりを覚えたときの喜びようといつたらなく、それからの特訓への気合の入りようも今まで以上になつていて。

息子が頑張っているのだ、私も頑張らなければ。

「はい。 いつてらつしゃい」

ナナミさんのほんわかした笑顔に小さく手を振つて、マサラの外へと歩きだす。体の向かう先はニビシティ。

とはいえる。私はマサラの町並みが完全に見えなくなつたあたりでトキワへ向かわずに、脇の雑木林へ入つた。

あたりを見回し、誰も居ないことを確認して腰に挿したホルダーからボールを取り出す。

「よし。 今日も頼むぞお前達。 フーディン、 ヤマブキの本社にテレポート」

「社長に呼ばれてきたのですが」

同僚に見つからぬように直接社長室のあるフロアにテレポートした俺は顔にメタモンを貼り付け変装しておぐ。間違つても俺だとわからないように掘りの深い西洋人フェイスである。

まあ、流石に背格好や腹はどうにもならんが。

「のフロアには緊急の事態にそなえていつでもテレポートで来れるようにフードインに覚えさせてある。

何か妨害電波や念波でもないかぎり直通だ。

「失礼ですが所属とお名前をうかがつてもよろしいですか？」

社長室の前、複数居る秘書の一人が秘書室から出てきて受付をしてくれた。初めて見る顔だ。

これが事情を知っている秘書長なら「あら、ハマサキさん。また社長に釣りの話で呼ばれましたか？ それで今度はどこに行かれんですか？」ああ、失礼。そのお顔といふことは今日はタダノさんでしたか

なんて声をかけてくるのだが。ビリヤリ今日は留守のようだ。

「ボナヤツングスカ支部のタダノです」

とりあえず前もって社長と決めておいた段取りで進めることにす

る。

「ポナンヤツグスカ支部のタダノ様ですね……はい、確かに」

「いえ、あのポナヤツングスカ支部の……」

「ああ、失礼いたしました。ポナンヤグツスカ支部のタダノ様ですね」

「……はい」

「それでは中で社長がお待ちです。どうぞ」「……なにも言えねえ」

電子式扉の前に立ち、コン、コンとノックをする。扉の横に備え付けられているモニターを使わるのは社長の趣味だ。ノックの方が雰囲気がでるとかなんとか。

「入りなさい」

ガチャッと鍵の外れる音がした。自動ドアだから入れも何も無いとは思うのだけど。

「ポナヤツングスカ支部、社内安全課実務係長タダノお呼びに応じ、ただいま参りました」

「うむ、よく来てくれた。特命係長タダノ」

「……遅くなりまして申し訳ありません。社内安全課実務係長タダノ、ただいま参りました」

「ふむ？ 時間に遅れてなど居ないが……まあいい。よく来てくれた特命係長」

特命係長というのには社長が俺に『ある種の仕事』を任せるとときに使う言葉だ。実際にそういう名前の職務があるわけではないし、断じて俺がそう呼ばれたくて頼んだわけではない。

こういう仕事をまかされることになった際に、ふと漫画の話みたいだと社長の前で漏らしてしまい、興味を持った社長にどんな漫画なのかも根掘り葉掘り聞かれて教えてしまったのが原因だ。

なぜか社長は特命係長というフレーズを気に入ってしまった。流石に職務名として組み込みまではしなかつたが、私をタダノとして呼ぶ際は必ずそう呼ぶようになったほどだ。

つまり完全に社長の自己満足なのである。良い年なんだから中一病をリアルに持ち込むのは自重してもらいたい。付き合わされるほうは心底恥ずかしいといつに。

「あの、社長。どうか、その特命係長というのは……」

「何か不満でも?」

「こわいからおをされてしまった。

「い、いえ、なんでもありません」

口撃力ががた落ちしたので攻めるのをやめて守るを使いやり過ごす。余計なことを言つて給料を減らされるのは勘弁である。「ならばよろしい。で、早速だが頼みたいことがある。当然断ることは許さん」

「はい」

総務のハマノではなくポナヤシングスカのタダノとして呼ばれた時点での少なくとも釣りの話ではないだらうとは思つっていた。よつて手持ちも準備も万全に整えてある。

タダノといつのは私の偽名である。もちろんポナヤシングスカ支部へといつのも実際には存在しない部署だ。

いや、書類やデータ上は確かに存在しているし、タダノといつ社員も社員名簿に登録されているけれど、その実態は幽霊部署と幽霊社員である。

なんせ両方とも俺が動きやすいように作られた仮の身分であるからして。

ちなみにタダノと書かれて前はこれまで例の漫画から頂いた。

普段の私はヤマブキ本社の総務一課で同僚や怖いが頼りになる上司に囲まれて仕事をしている。

先に断つておけばハマサキはこっちの世界での俺の本名であり、社長と釣り仲間というのもまったくの偶然であるのであしからず。

「明け方、クチバの沖合いでわが社の輸送船からギャラドスの大群に囲まれ身動きがとれないと通信が入った」

（ギャラドスの大群？ なんでそんなものがクチバの沖合に……）

（アニメージャボーマンダ一匹で追い払えていたが。

こっちじゃ現実補正とでもいうか、そんな生易しいものではない。彼らのすべてが怒り狂えば少なくとも町ひとつが無くなつてもおかしくないレベルの危険度だ。

その危険性は海を行くものならば誰でも知っているので、多少遠回りでもギャラドスの群れが出没する海域からは遙かに離れたところを通りていく。

幸いなことに、ギャラドスの生息域はここカントー地方では人の活動域からずつと離れており。

単体でならば極稀に目撃されることもあるもののクチバ周辺に群れで現れることがなどなかつたのだが……。

「その数、およそ200。さらにクチバの港にある消波ブロックの一部が数箇所、何者かによつて破壊されているのも確認された

「……それはつまり」

「つむ。もしこのままギャラドス達を刺激しよつものならば津波が起きるかもしけん。いや、起きる。そうなればわが社だけではなく、クチバにも甚大な被害が出るだろ?」

「偶然、ではないですよね」

「ああ。十中八九、我々への攻撃だろ?。いったいどのような手でギャラドスの群れを誘導したのかはわからんが……」

「それが出来るだけの技術力と人員を持った奴らの仕業、といつことですね。マケスチアインダストリアルか、ソードリ重工か……口ケット団か」

「緊急の事態だ。捜査は後回しでいい。現在消波ブロックの修繕を急いでいるが、それを待っている時間的余裕もない。君が行ってくれ

れ

「わかりました、このまま現場へ直行します」

「うむ。たのんだぞ特命係長」

だから重してください社長……。

マサラタウン オーキド邸

「じゃあ、お姉ちゃんちょっとお夕飯の材料買いに行ってくるから留守番お願いね」

「はーい」「

……5分後。

「よし、俺の勝ち」

「うわあ、今のひどいよ、なしだよ。ハメじゃん」

「へへへーん、端っこに逃げたお前が悪いんだぜ」

「くっそー、じゃあいこよ、今のはシゲルの勝ちでいいからもう一回やるわ」

「おーい」「おーい、シゲル、居るかー？ 遊ぼうぜー

あ、ミシカズたちだ

「えつ……」

「そうだ、お前も来いよ」

「え、でも」

「平氣だつて。あいつら先にポケモン貰つたお前がうりやましいだけなんだから、ちゃんと話せばイケルつて」

「う、うん……」

玄関先で待つていたのは一人の男の子だった。

「あー！ シゲルつ！ なんでそいつがいるんだよー…
ぼつちやりした男の子がサトシを指差す。

「う……」

「なんでつて家でいつしょに遊んでたからに決まつてんだろ」「

「サトシがいつしょなら俺遊ぶのやーめた」

瘦せ氣味の少年がふてくされた声で言つ。

「はあ？ 意味わからぬ。別にいいじゃん、サトシが一緒でも

「俺知つてるぜ、そいつ、ポケモン持つてるくせに草むらに入れな
い臆病者だぞ」

「つー…」

「何言つてんだ。草むらには入つちゃいけないつて父ちゃんたちに
言われてるんだからしうがないだろ」

「なんぢょ、ポケモン持つてないと入つちゃいけないつてだけなん
だから持つてるなら入つてもいいじゃん」

「そつそつ、なのにポケモン持つて草むらに入ろうとしないのは
変だよ。ポケモンはバトルさせて強くするもんだろー」

「お前らこそ何いつてんだ。別にそんなこと決まつちゃいないだろ。
自分達が10才まで自分のポケモンもらえないからつてひがんでん
じやねえよ」

マサラタウンでは10才から自分のポケモンを持つことを許される。
だが、サトシはクチバに住んでいたころにコイキングを貰つたので
引っ越してきたときにはすでに自分のポケモンが居た。
それが地元の子たちには羨ましくて仕方なかつた。

余所からの子と並ぶ点に妬みも加わりサトシは地元の子供たちの中では村八分にされていた。仲の良い友達はいまのところシゲルだけだった。

シゲルはオーキド博士の研究所で様々なポケモンを見慣れていたので、サトシがポケモンすでに持っていることをなぜか気にしていた。なかつた。

むしろ初めてのポケモンがコイキングであると知ったときは哀れんだ。ギャラドスに進化させたいんだと聞いたときは無理だらうとも思った。

が、サトシの特訓を知り根性のあるやつだと感じ、心中では応援していた。

「なんだと!? シゲル、てめーふざけんなよ。ああ、そうか。おまえおじいさんとエライ人だからめずらしいポケモンもうるつて余裕ぶつこいてるんだな」

「はあつ? ジーちゃんはかんけーねえだろ」

「うつせえ、もういいよ、これからはおまえも遊びにわそつてやんねえから」

ぱっちやりの言葉に頷くがりがり。

「臆病者は臆病者どうしで遊んでればいいぞ」

「意味わかんね。なんで俺が臆病者なんだよ」

「臆病者と遊ぶやつは臆病者だ」

「だーかーら。意味わかんねえって言つてんだが。お前らサトシがどんだけ頑張つてるかも知らないで勝手なことこいつてんじやねえよ」

「うつせえつ」ドンッ

ぱっちやりがシゲルを突き飛ばした。

「いつてつ!」

「シゲルつ!?」

「何しやがるつ! デブつ!」ドンッ

「つてえ、な、何しやがるこのバカ」ドッ

「つっ、やりやがったな！」ドカッ

「ちょうどいいや、おまえ、いつも偉そりで気に食わなかつたんだ
痩せ氣味の少年も加わりシゲルに殴りかかつた。

「てめっ」

おどりいたサトシは必死で痩せたほりに飛びつき動きを止めようと
するが、生まれてこの方取つ組み合ひの喧嘩はほとんど経験の無い
サトシ。特別力の強いほうでもない。

たいして相手は痩せ氣味とはいえ取つ組み合ひの喧嘩は日常茶飯事
の田舎暮らし。あつせりと振りほどかれてします。

手の空いた痩せ氣味の少年はぼつちやりに組み敷かれたシゲルを蹴
飛ばしに行く。

それを止めさせようとするサトシだったが、そのたびに振りほどか
れ自由になつた痩せ氣味の少年はシゲルを蹴りに行く。

シゲルはぼつちやりとの体重差で押し負けてしまい、うまのりで殴
られていた。鼻血も出でているが泣いてはいない。むしろぼつちやり
を睨みつけ、下から何度も殴りつけている。

が、痩せ氣味がキックするたび、抵抗する力も弱くなつていく。

初めての親友が目の前で自分のせいに傷ついていくのをサトシは黙
つてみてられなかつた。

「くそっ！ わかったよっ、僕が草むらに入ればいいんだろつー。」

それはドククラゲの刑よりも嫌なことだつたのだ。

息子とマイкиング 2（後書き）

最後まで書きたかったのですが、時間の都合でとりあえずここで切らせていただきました。

我ながら主人公の設定が無茶苦茶にもほどがるな、と書いてて思いました。

……いや、まだこれくらいなら許容範囲……かなあ？

メタモン変装なんかは漫画でもあつた気がしますし大丈夫だとは思うんですけど。

正直主人公について書くよりも息子の周りを書いていくときのほうが書きやすいです。なんでだ。

ドククラゲの刑がどんなものかは想像にお任せします。

鳥取ヒヤキンケ 3 (繪書モ)

父ちゃん無双の回になりました。

クチバシティ クチバ港

クチバシティは周りの海を消波ブロックで囲み、危険なポケモンや津波の被害を防いでいる。

クチバの港はナナシマや他の地方との連絡船が行きかう大きな港だ。

そしてその波止場は消波ブロックの間を抜けるように伸びている。

「ここからじやあさすがに現場は見えないか」

その最端に立つて眼を凝らすも、何も見えない。あるのは遙かに向こうまで続く水平線のみだ。

「さすがにこの辺にはもう誰もいないか」

あたりには人の気配はない。それもそのはずクチバシティではシルフカンパニーからの連絡により津波警報が発令されていて、人はみなとっくに避難済みである。

風はゆるやかで、波も高くない。空にいたつては晴れ渡っている。ただ違うのはポケモンの気配がないことか。

きっとポケモンたちもこれから起こりつつある災害に感づいているのだろう。

「ちょうどいい、出番だぞ、カイオーガつ！」

そう叫んでボールを宙に放れば ギィイイグウオオオオ と

迫力満点の鳴き声とともに巨大な体が現れた。

着水の衝撃で跳ねた大量の水を頭から浴びせられる。

「ああ、そういうやースツのままだつた……まあ、いいか」

カイオーガが出てきた途端、さきほどまで晴れ渡っていた空はみるみるうちに曇り始める。まだ雨は降つてこないが、ゴロゴロとなつているのを見ると時間の問題だらう。どうやら雷雲まで呼び寄せたようだ。

体長、実に4・5メートル。体重352キロ。特性、あめふらし。流線型のフォルムに幾何学的な文様。どことなくクジラっぽいがホエルオーなどとは明らかに異なる。

ある地域では海を広げたという伝説があり、神様のような扱いを受けるポケモンだ。

他の地方の一般人ではまず知らないだらうが、ちょっと伝説に詳しい人間や学者、そして伝説の残る地方の人を見れば卒倒しかねないポケモンである。

はつきりいつて私の調べたかぎりでは目撃例なんて皆無に等しかつた。50年前に大雨の中それっぽい巨大な影をみた、なんて見出しがとある地方のローカルな新聞に載つていたくらいだ。まして捕獲となると世界に私だけかもしれない。

しかも紫色の色違いだ。その希少性といつたら天文学的な数字になるのではないだろうか。

まあ、こいつを捕獲するための搜索や機材にはシルフカンパンバーの協力があつたのであまりおおっぴらに胸を張れないのだが、バトル自体は自力で行つて手に入れたので問題なく俺の言つこと

はきいてくれる。

「さて、それじゃあ行こつか。今日は存分に暴れていいで。なみのりだ！」

ギィイイグオオオオオオオオ！

カイオーガは伝説になるだけあつてその戦闘力もまさしく超一級品。恐ろしくて公式戦では一度も使ったことが無い。他にも今回のような仕事でよく使っているので、恨みを買つている人間にばれたら困るという理由もあるけれど。

普段の生活まで物騒な奴らに追い掛け回されたくは無いのだ。そうなつては何のために偽名と嘘の所属まで作つてもらつたのかわからなくなる。

元気よく返事をしてくれるカイオーガに跨り海を進む。

バシャアアン、バツシャアアンと海を割るように水をかきわけて猛スピードで進むカイオーガの雄姿。そしてその背中で振り落とされないよう必死でしがみ付くメタボな私。

実に無様だけど、しがみ付くメタボな私。現実で厳選なんて……。シンクロも用意しておいたが見事に外れたのだ。

クチバ近海　沖

現場についてみるとすでに何体かのギャラドスがシルフの貨物船と思われる船にたいあたりをかましていた。

右から左から、次から次へと巨大なギャラドスたちのたいあたりで、船は沈んではないもののボロボロだつた。

「こりゃまずい。カイオーガ、かみなりだ！」

すでに雨は降り始めている。雨天時のかみなりは必中だ。カイオーガが何らかのエネルギーを集めて天空へと放つた。直後、暗雲の間からいくすじもの稻妻が一瞬の光と轟音を伴つて落下し、貨物船を囲んでいたギャラドスたちに直撃した。

「まず8体つてどころか」

海を通じて電流が流れたのか、貨物船の周囲に居たさらに数体を巻き添えにしたようだが、海の底から次々にギャラドスたちが湧いて現れた。

いつせいにこちらをにらみつけてくる。

「いかぐ、か。タイプ一致4倍でも数が多いな」

ギャラドスの大群にいつせいにいかぐされ怯えてしまつたカイオーガの背を優しく撫でてやる。

「大丈夫だつて。お前の方がずっと強いから。それに俺もいる」

ギイグウオオオオ！

「どうやらわんぱくなだけあつてそれほどじれていたわけではないよつだ。抗議の声をあげてくれる。

「わかつた、わかつた。相手の数が多くてちょっとひるんだけ、だろ？」

わかれればいいんだとばかりに鳴き声をあげるカイオーガに苦笑してしまつ。

「じゃあどりあえず、もういつかいかみなりだ！」

再び、カイオーガがエネルギーを集め上空へ放とうとする。

が、それを邪魔するようにギャラドスたちが一いつ列へ突進してきた。

「避けろつ！」

バシヤンとカイオーガがよこつとびに跳ねてギャラドスの群れをギリギリのところでかわし、そのまま泳いで離れていく。

「カイオーガ、困まれないようとにかく動きつつ、かみなり！ 船からギャラドスたちを遠ざけるんだ！」

ギィグウ オオオ！

全速力で水上を移動しながらときおりギャラドスたちにかみなりを落としていく。

カイオーガの種族としてのすばやさはからうじでギャラドスを上回っている。本来ならば積み技や持ち物、もしくはよほどのレベル差でもないかぎり抜かれることはない。

しかし、今行っているのはは一対一のバトルではない。ただでさえ数が多いのに加え、カイオーガは俺を背にのせているため水に潜れない。

いや、カイオーガは水を操れるので短時間なら問題ないだろ？。しかし、今度は頭上も取り囲まれてしまう可能性が出てくる。

その上、水中ではかみなりが落とせない。出せるには出せるが拡散してしまって必中ではなくなるし、自分も感電しないように防御をする必要が出てきてしまう。

やはり水中へは逃げられなかつた。

右に左に、時に真下から突如として現れるギャラドスたち。

確實に数は減っているはずなのだが、水中から次に次に湧いてくるギャラドスを見ているとむしろ増えていくようにしか思えない。中には高レベルのやつも混ざっているのかはかいこうせんが飛んできたりもした。なみのりをしているのがカイオーガじゃなければ俺は死んでいたかもしれない。

そうして気付けば周囲360度を囲まってしまっていた。見た感じまだ3桁以上いそうだ。水中にも気配がある。それもうじやうじやど。ひょっとして世界中のギャラドスがここに集まってるんじやなかろうか。なんてふざけた考えが浮かんでしまうほどだ。

青青青、周囲はすべて青一色である。

「貨物船は……よし、離れたな」

からうじでギャラドスたちのすきまから遙かかなたに去っていく

貨物船の姿を確認できた。

「もついいだろ？。ありがとうカイオーガ」

ギイグウオー！

「さて、貨物船も離れたし、クチバからも遠ざけた。……よし、あとはこいつらを静かにするだけだな。みんな出て来い！」

ジャケットの中の隠しホルダーから4つのボールを掴み、中空へと放る。

ボールの中から出てきたのはレックウザ、ルギア、サンダー、そしてジラーチ。全員、カイオーガに勝るとも劣らない伝説を持つポケモンだ。

あつちの世界でこんなパーティを対戦で使つたら伝説厨呼ばわりされても文句が言えない、そうそつたる顔ぶれ。

当然だが、全員カイオーガと同じく自力で捕獲した。本当に信じられないほどの幸運が重なつて手に入れたポケモンたちである。努力と幸運と恩情と偶然と人脈とごく一部の原作知識によるチート。そういうふた様々なもののおかげだ。

私はレックウザの背中に飛び移ると上空から指示を出した。

「総員、かみなりだ！」

フラッシュ以上の光と爆音が海上に轟いた。

あたりの海は凄まじい有様になっていた。

伝説級5匹によるかみなりは海中に倒たがヤララドスたちも仕留めてしまつたらしく。

海を埋め尽くす、ひんしのギャララドスたち。

「……あー、調子にのつすぎたわ

自分のやつた凄惨な跡を見せられると高ぶつていた気持ちが急速に落ち着いていく。

「モンスターボールは……足りないよな

というか、こんな数のギャララドスを送つたらマサキさんとのパンコンが破裂する。

「しかたない。ジラーーチ」

宙に浮いていたジラーーチをちょいちょいと手招きしてそばに呼ぶ。ジラーーチはきらきらと光の軌跡を残しながら近寄ってきた。

「頼む、ねがい」としてられないか？ さすがにこれを放置するのは気分が悪くて

まかせんしゃい、とばかりに小さい手で胸を叩くジラーチ。

キュイイヤー

鳴き声とともにジラーチが手を天にかざすと、雲の切れ間から数え切れないほどの光の束がギャラドスたちに降り注いだ。

「うん、これであとはほつといても大体大丈夫かな。ありがとうジラーチ」

いやしのねがいで全快させないのは、このあと報復としてクチバの町や貨物船に再び襲い掛かられても困るからだ。

これで元気を取り戻しても、どこかを襲うだけの余力は残っていないだろうし、冷静にもなつていることだろう。

きっと深海か、元の海域に戻つてくれることだろう。

「それにしてもどこのどいつか知らないが、どうやってこんなにたくさんのギャラドスたちをこんなところまで誘導したんだ？ 電波か？」

少なくともギャラドスたちは操られている様子ではなかつた。

「どうか、操れるのならもっと効率的に襲えるはずだ。いや、それ以前に貨物船なんてけちなことを言わず、もつと重要な拠点を攻め落とすことだってできただろうし……。

「ま、あとは社長に報告して大体は終わりだな

これから向かう血を報告しようとして取り出したポケギアに通信が入つた。

「む、ナナミさんから？……もしもしハマサキですが」

「ああ、やつと繋がった！ハマサキさんサトシ君が見つからないんです！」

「え？ ちょっと待つてください、ジブンことですか？」

まさか。嫌な予感がする。

「わたしが買い物に行つてるあいだに子供たちだけで草むらへ入つたらしくて！シゲルたちは無事に帰つてきたんですけど途中でスピアーに襲われてサトシ君とはぐれたつてつ。今、マサラに居る大人全員で探してゐんですけど見つからないんです！」

血の気が引くのを感じた。

「い、今すぐ戻ります！」

ポケギアの通信を切り、急いでレックウザ以外のポケモンたちをボールに戻す。

「頼む、レックウザ！この際どこでもいいから一番近い陸に上がつてくれ！」

そうすればフーディンで息子のもとへテレポートできる。こういつたときのために息子にはシルフの協力でフーディンの念力を応用して作った念動性の発信機を取り付けてある。

「急いでくれ！」

轟！と空を翔るレックウザ。その背にしがみ付きながら私は息子

の無事を祈つていた。

(サトシ！ 無事でいてくれ！)

島子とハイキング 3（後書き）

息子とハイキング出てきてないですが、きりがいいのでここまで、です。

実は間違つて全文ツ着終わつた直後に削除してしまつて、まるで」と書き直しました。これ

おおまかなストーリーは変わつていませんが文章は随分と変化してしまつた……。

消す前と比べちがよかつたのかはわかりませんが、とにかく疲れました。

主人公が驚くほど無双して超展開の連続ですが、仕様です。やりすぎたとも、無茶苦茶すぎるとも思いますが、これはこれで書きたかったもののひとつなので、そのまま投稿しました。人によつては即バックな内容かもしれませんが、……。
最後まで読んでくれてありがとうございます。

1 ばんごう

「言つておくけど入つてすぐ戻るのはなしだかんな！」

ふとつちよが無駄に大きな声で言つた。

病者でないことを認めてやる。

をふとこせ、と云ふ別れだ

サトシはコイキングの入ったボールと父親のくれたお守りを握り締めて草むらの前に立った。

自分でも心臓が痛いほど鳴っているのがわかる。

重く感じられた。

「ほて異生のカクモンはニベキンクシガホミにしがことかないのうえいつも父親がそばについていた。

(一)、怖くなんかない！

シノア「アサヒトハサウエー、ハリウッド」

「ひめう」

後ろから背中を押された。が、足は重りをつけたかのように動いてくれず、前のめりに転んでしまった。

「サトシっ!?」

「ううわ、まぬけでやんの

「っくっそー！」

とつたに空いていたついた手のひらと地面にぶつけた膝には擦り傷が出来てしまった。悔しくて、涙が出そうになる。が、ここで泣いてしまっては余計にからかわれるだけだろう。それでは惨めさが増すだけだ。

「ゴメン、サトシ。俺がムリヤリ誘つたからっ」

「いいんだ、シゲル。ぼく決めたんだ。臆病なんかじゃないって、証明する。……行つてくるよ」

そうだ。初めてコイキングとあつたあの日から毎日頑張ってきたんだ。それは憧れのプロトレーナー、ワタルのようにかっこよくなるためにある。

決して臆病者と笑われるためでも、親友を傷つけるためでもないのだ。

「ま、待つた！」

だけど、それはシゲルも同じだった。仲良くなつた友達が他のやつらとうまくいっていないのをなんとかしてやりたかっただけ。

それだけだったのに、なぜか親友に大事な父親との約束を破らせてしまうことになっている。

自分の責任なのに。深く考えず一緒に遊べば、仲良くなれると、話せばわかる、と簡単に思っていた自分のせいなのに。このままサトシを一人で行かせてしまつたら……それこそシゲルは自分が許せなくなりそうだった。

「おい、カズヨシ！ バトルっていうけど誰がそれを証明するんだ。

お前らのどちらかがついていかないとわかんないだろ？…」

「なつ……たしかに、それはそうかもしれないけど」

「かもじやないつ！ もし、」そのまま一人で行かせてサトシがちやんとバトルして帰つてきても、お前ら、いぢやもんつける気だろ？ やい、もしそういうことしたら俺は絶対にお前らを許さないぞ！ マサラ中にお前達のことを卑怯者と呼んで回つてやる」

ふとつちゅとやせぎみの少年二人は顔を見合せた。「あい、どうする」「無視すればよくない？」「けど、卑怯者つて呼ばれるのも嫌だ」「え、いぢやもんつけるきだつたの？」「ちがうけど、本当にバトルして帰つてきたかどうかわからんないだろ？」「それはそうだけど……」「ついていくか？」「ええつ、で、でも……」

「し、シゲル？」

「どうなんだ、ヨシカズ、ヒロキ！ サトシのことを臆病者呼ばわりしておいて自分達は行きたくないってのか」「なんだと！」

「サトシはポケモンを持つてるじゃないか！ 俺たちはポケモンもつてねーもん」

「へつ、臆病なのはそっちじゃないか。俺はサトシにつっこべば、」

「し、シゲル！ 危ないよ！」

「いいんだサトシ。お前一人で行かせたら俺が姉ちゃんにひどいめに遭わされちまうし。一人なら怖くないだろ」

「け、けど……」

「おじさんにも約束破つたこと一緒に謝るからさ、頼むよ」

「……」

サトシは悩んだ。

シゲルが付いてきてくれるのは心強いが、ポケモンを持つて居ない以上、一緒に行くべきではないと思う。でも、親友の眼は断つてもついてくると言つていた。

短く、だが、深く悩んだすえ、「サトシせりに覚悟を決めた。

「わかった。でもポケモンが出てきたらそのまま逃げて。
ぼくと「イギングじゅとも守つされないから」

「おひ。約束する」

「おい、臆病者じもー。俺らはもう戻るべー。もし来ないんなら俺達が戻ってきたときを覚悟してねけよー。行こうぜサトシ」「うんー。」

「ま、待てー。俺達もつこへー。」

「ばくじゅう」

草むらにあるくじと5分。いまだ野生のポケモンと戦わないとなく、子供もたちは歩こんでいた。

「この辺は毎はボッポやコラッタ、夜になるとホーホーやポチエナが出るんだぜ」

「へー」

草むらに入る前はあれほど緊張していた彼らだが、5分もの間なにごともなれば、子供の緊張などそつ続くものでもない。

「ホーホーとポチエナはまだ寝てるはずだから、たぶん出でてくると

したらポッポが「ラッタだと思つ」

「ポッポと「ラッタか。あんまり強いイメージはないね」

「ああ、よく見るポケモンだしな。でも、ラッタもポッポもレベルが高いのは強いぞ。爺ちゃんのところに預けられたラッタはひつさつまえばを覚えてたし、ポッポはかぜおこしを覚えれば空から攻撃できる」

「……そんなにレベルの高いのが出でたら「トイキング」じゃ勝てないかも」

「まあ、十中八九そうだろうが、まず出でこなーから安心しろつて」

先頭はサトシ。次にシゲル、やせきみと続いて最後にふとつりよ。

「なあ、サトシ。お前のポケモンって「トイキング」ってこいつのか?」

「そうだよ」

「「トイキング」ってどんなポケモンなんだ?」

「え?」

「え?」

空気が止まつた。

やや闇をおいてシゲルが口を開いた。

「まさか、お前らサトシのポケモンがどんなのかも知らないで臆病者とか言つてたのか?」

「あ、ああ、え、俺達なにか変なこと言つたか?」

「ハイキングって、あれだぞ、お前らもみたことあるだ？」

「え？」

「ほら、マサワの南にある水道でよく流れてきた奴が溜まってるだろ」

「……え、何、サトシのポケモンってアレなの？ あの水の通りが悪くなるからって時々、まとめて網で掬いあげてる、アレ？」

「そう。アレ」

「いやいやいや。嘘だろ？ え、アレ闘えんの？」

「失礼な！ 戦えるよ！ ……ハイキング相手なら確実に」

「……ゴメン、俺達が悪かった。だからもう帰る。流石にアレを頼りに野生のポケモンとなんて出会いたくない」

「なんだ、そりや。ちゃんと謝れよ？」

「サトシ、臆病者なんて言ひてゴメンな……」

「俺も、本当にゴメン……」

サトシはとても複雑な気持ちだった。謝つてくれたのはいい。けれど何か凄く納得がいかない。

「あー、サトシ。戻るうぜ。もうこれ以上草むらを歩く必要もないし、姉ちゃんたちが心配する」

「…………」

サトシのテンションが日に見えて下がった。が、シゲルはそれに苦笑しながら返してやれなかつた。

「なあ、あれなんだ？」と、突然ふとつちよが今まで向かつていたほう、トキワシティ方面から何かに向かつてくるものを見つ

けた。

「ゲツ！？ 瞳だろ」

シゲルが顔を真つ青にして叫ぶ。

「みんな逃げるー。あれはスピアーダーだ！ 毒を持つてるから刺されたら大変なことになるぞー。」

それは遠めでもわかる黄色と黒の警戒色で、ブーンと耳障りな音を立てながらまっすぐにサトシたちのほうへと向かってきていた。

「うわああああ」「ひここここ

ふとっちょとせせみがマサラヘビー田畠に走り出す。ついでシゲルもそのあとを追った。サトシもその後ろについていった、が。

「うわあー！？」

足元のじじいろを踏ふづけて転んでしまった。手元から握つ締めていたお守りが転げ落げる。

「サトシーー？」

後ろでした転倒音に慌てて振り返るシゲルだったが。

「いいから、シゲル先にマサラに戻つて誰か呼んできひー。」「で、でもー」「ぼくはコイキングがいるからー。はやくー。」

シゲルは親友を置いていく」と一瞬躊躇したが。

このままスピアーに追いつかれたところで足手まといになるだけだと、判断し踵を返して走り去る。

「わかった、すぐ戻る。」

セウジでサトシは腰のモンスター・ボールに手を伸ばした。スピアーはもうすぐそこまで来ている。

「はは。頼むよ、『イギング。草むらトドロー戦からこきなつシビアな相手だけど、頑張れるよね』

「マサラ付近

ブランー

「サトシー。」

フーティンのテレビポートでやつてきた場所はマサラ近くの草むら。しかし、サトシの姿はどこにもない。

「これは、お守りがなんでこんなところ。へへ、サトシだ

！」

万が一に備えて持たせていた発信機入りのお守り。それが道の途中に落ちていた。

（マズい。さっきから嫌な予感が止まらない）

「くっ、みんな出て来い！ 手分けして探すんだ！」

平和に暮らしたいだとか、そんなのは息子がいてこそだ。大前提から守れないのならば、隠し通すことに意味などない。腰のホルダーとジャケットのホルダー、そのすべてのボールを宙に放り投げる。

スター・ミー、フーティン、メタモン、ドククラゲ、マンタイン、キングドラ。
カイオーガ、レックウザ、ジラーチ、サンダー、ルギア、レジスチル。

空に、周囲の林に、地の下に。あらゆる方向へ散らばる仲間たち。

念のためにポケギアでナナミさんに繋ぐ。

「もしもし、ハマサキです。今、1ばんびりに面るんですが、サトシはまだ見つかっていませんか？」

「ごめんなさい、サトシ君はまだ……」

「そうですか。いえ、気を落とさないでください。あいつは私の息子です。7歳とはいえ、ポケモンも持っています。ええ、絶対に大丈夫ですから」

震える指で通信を切る。

「サトシ、どこで居るんだ……」

キュイアー

「ジラーチっ！ 見つけたのかーー？」

キュイアー

イエス、と頷き返りをするジラーチ。

「でかした！ 頼む、案内してくれー！」

「ばんじり？ ？？？」

「……まだ居るや」

ペチッ

サトシは雑木林の枯れた巨木、その洞の中にコイイキングと身を潜めていた。

スピアーは強敵だった。

ただ不幸中の幸いともいえばいいのか。

進化したてだつたらしく、レベルはそれほど高くなかつたよつて、
どくばりといとをはくしか使ってこなかつた。

これまでの特訓の成果が発揮されたのも大きかつた。
敵の攻撃を見極め、はねるを上手く使ってかわす、再度攻撃をしよ
うと中空から降りてきたところをたいあたりで叩く。
それを繰り返すことでなんとか撃退できたのだ。

しかし、サトシにとつて不幸な誤算だつたのはスピアーが近くにも
う一匹いたことだつた。

コイキングにはとてもじやないがスピアー相手に連戦できるだけの
体力なんて残つていなかつた。

さらに毒を受けてしまつたのか、痙攣を繰りかえしていく様子もお
かしかつた。

はねるでかわしたとはいえ、何度も直撃も受けている。
サトシはそう判断するとコイキングをボールに戻し、すぐさま逃げ
出した。

まっすぐマサラへ向かうつもりだつたが、途中でさらにスピアーの
数が増え、逃げ回つてこらう中にこんなところまできてしまつたの
だ。

「……はやくどつか行つてくれよ

手を組みあわせて願い事なんぞをしてみるも、誰がかなえてくれる
といつのか。

サトシは、なんとなく洞の隙間から何かが返事をするよつてきらめ
いた気がしたけど氣のせいのよつだった。

ブーン ブーン
ブーン ブーン

だって、スピアーたちほんぢんじから近づいてくるじゃないか。

どうもにおいか何かを頼りにこちらを探しているようだ。

こちらには毒状態と思われるコイキング一匹。レベルはどちらが上がわからないが……おそらくそう大差は無い。スピアーの進化するレベルは10、対してコイキングが進化するレベルは20だ。サトシのコイキングはたいあたりを覚えたもの、まだ進化していないので19以下。スピアーは確実に一匹一匹がすべて10以上。極稀にそれ以下のレベルのものもいるが、そんな都合のいい考えは捨てておく。

これは、いよいよ、覚悟を決めるしかないんじゃないかな?

「よし、決めた。気付かれる前に外へ出て走るよコイキング」

ボールの中の相棒に声をかける。返事なんて出来ないだろうが、どちらかといえば言葉にすることで震える身体を動かそうとこう口ひきに近かったので構わない。

一気に、洞を飛び出す。

こちらに気付いて飛んでくるスピアーたち。

恐怖が心を支配していく。とにかく怖くて足を動かした。

「へふっ」

そして、本日三度目の転倒をかました。
木の根に足をひっかけてしまったのだ。

ブーン
ブーン

ひつ

感情の読み取りにくらい複眼がサトシを捉えた。両腕の針はギラリと輝いている。

あの鋭く太い針で自分は刺し貫かれるんだろうか

無意識に想像してしまい、喉からかすれた声が漏れた。

歯の根は含むすが子が子と音を鳴らすだけ

(怖い)

自分が何をしたというんだろう。なぜこんな目にいるんだろう。生まれてから最大級の理不尽を前にくやしさと恐怖で涙がこぼれた。ふと、ホルダーに入れておいたコイキングのボールが激しく震えているのに気付いた。

「……『トイキング』？」

おれでいいから田舎で暮らしてこながい感じられて、カーテンは白い

すると……直後、光に包まれて、巨大な、赤い、竜。

いや、色違ひの赤いギャラドスがそこに居た。

ギャラズのいかくにスピアーたちはひるむ。

「じゃあ、ギャラディス！」

サトシに返事をするかのように巨大な尾ひれを大地へと叩きつける。それだけで地響きが起きた。

「進化、した。とうとう進化したんだ……。あ、ギャラドス！　スピアーにたいあたり！」

ノンノ・アーバン

その巨体をいかしたたいあたりで一度に一体のスピアを弾き飛ばし、戦闘不能にした。

「イギングのときはあんなにてこずつた相手がいつもあつさりと倒れるのを見てサトシは驚いた。

「…………あ、これはヤラデス！」

しかし

「え、あや、ギャラグスー？」

ギヤラードスはどく状態が治つたわけではなかつたのだ。
その巨体がまるで糸の切れた人形のようにならへて地に倒れこむ。

「ギャラディス！ しつかり、目を開けるんだ！ ギャラディス！」

倒れたギラードスに駆け寄り搖さぶるサトシ。しかし、ギラードス

はひんしになつてしまつていた。

そして叫ぶサトシに残つたスピアーリーが針を向ける。

「つあ、ああ、とつ、ちゃん、助けて……助けて、父ちゃん……！」

サトシの声が引き金になつたのか、スピアーリーたちがいっせいに彼へと群がつて

「サトシッ！」　キュイアーリー！

父親の飛び蹴りとジラーチのすてみタックルがそれらを弾き飛ばした。

「ぐすつ、えぐ、と、とつちや　あああん！」

「無事か、どこか怪我してないか！？」

「うん、うん」

「……無事でよかつた」

「や、やぐ、やくそくつ、やぶ、やぶつて、じめ、なさ」

「ああ、いい。あとでちやんと叱つてやる。だから今はいい。とにかく見つつかつてよかつた」

久々に大泣きする息子を抱きしめながらたつた今弾き飛ばしたスピアーリーのほうを睨む。

「たぶん、お前らの繩張りが近くにあつただとか、お前らのお前らの理由があるんだろうが。家の息子を泣くほど苦しめた以上、落とし前はつけさせてもいいわ」

「ジラーチ！　フルパワーでサイコキネシスだ！」

不思議な力がスピア一派を包み込み縦横無尽にあちらにこちらへと叩きつける。

ドガン　ベキン　ミシイ　メコオ　ズガン！

その様、まさにシェイク。

タイン一致の效果抜群

スピアリたちにはあざけりと戦闘不能になつた

「……よくやつた。先にボールに戻つててくれ」

ビ
シ
ュ
ン

ジラーチをボールに戻し、息子と向き直る。

「話は家に帰つてから聞こう。ほり、まずは鼻拭け」

卷之三

「？」

「よく頑張ったな。ギャラドス。かつこいいじゃないか」「うん。」

おまけ

当日夜。

理由や経緯を聞いた結果、息子の行為は褒めてやった。が、ドククラゲの刑は執行した。

これで当分、無茶はしないだろう。

しかし、子どもの成長速度には驚かされる。これはあの人によたのだろうか……。

おまけのおまけ

仲間達の回収を忘れていた。『機嫌取りに手作りポロック一年分を要求された。俺一人でどうしろと……。』

島子とハイキング 4（後書き）

疲れた……丸一日、休み全部使って書いてました。
色々、地の文とか見せ方、演出とか、もつと思い浮かぶといつもあ
りますが、ひとまずこれで投稿。
疲れました……。

息子とリバイバル

マカラタウン 白井

「サトシ、今田の夕飯は何がいい?」「んー、なんでもいいよー」

仕事を終えて帰宅した私は、居間でポケモンリーグの実況中継を見ている息子に問いかけた。

が、息子はテレビに移る派手なバトルに夢中なようで生返事。

（なんでもってのが一番困るんだよなあ……）

今日は水曜。

仕事帰りに寄ったスーパーでタイムセールになっていたものを中心に買つてきたので食材はたくさんある。

ただ何を作るかを決めずに買つてしまつたので、いざ作ろうとして献立に悩んでしまつているのだ。

（……どうせ、大したもの作れないけどな。でも、いつもやう考えて簡単なので済ましちまつてるし）

それはサトシに悪いと思つてリクエストを聞いてみたものの、何の解決もしなかつた。

まあ、それならそれで良いと思い直しスーパーの袋から食材を取り出しつつ献立を考えてみる。

「お、ひき肉とたまねぎ、それとんじんか……もやしもあるな。

あらひ、ほつれんそうとえのきもか。うーん……ああ、そつこやまだ冷蔵庫にキヤベツも残つていたな

たしか豚肉も冷凍庫に入れていたはず。この食材で私が作れるものと言つたら……。

「サトシー、ハンバーグと野菜炒め、どっちがいいー？」「ハンバーグ！」

顔をテレビの画面から逸らすことなく即答かい。そいつの生返事はなんだつたんだ。そんなにハンバーグが好きか。大変子どもらしくて良いのだが、あんまりにもテンプレすぎるのでちょっと意地悪してやりたくなつてきた。

「じゃあ、お肉と回じくらいたまねぎとにんじんが入つていて、付け合せに野菜たつぷりのハンバーグと豚肉たつぷりの野菜炒めならどつねだー？」

「えつ」

やつとトレーディングカードの顔を離して、ひなりを向く鳥子。しかめつづらを浮かべて悩んでる。そこまで悩むことむなこだわつに。

わしわし、いちの鳥子はえり答えてくれるのか。

「えつと……、じゃあ、どつちかペーマン入つてるー。」

「あつはつは。今日はどくからも入つてなこよ。」

「ほんとー、やつたー。」

息子よ。お父さん、好き嫌いは良くないこと思つんだ。でないと明日の夕飯はピーマンの肉詰めこしきやつだ。もしかするとピーマンだけ残したりドククラゲの刑で。

「で、どうがいい?」

無邪氣に喜んでいた息子の顔がまたしかめつづいた。「ーんと、唸つるほどに歎んだ末出した答えは。

「お、お肉の多いほう!」

「……せつか。じゃあハンバーグにしてよつか」

「やつたー! あー、CM終わってるー?」

脱兎の如き速さで再びトレーピの前へと戻る息子。

……わがの子、わかつと単純すぎないか? あと一年と少しで10歳だが、本当に一人で旅が出来るのだろうか? 超がつくほど不安なんだが……。

「サトシ、『』飯食べ終わつたら今日の分やるからなー」

「ええー、ギャラドスがいるからこりよー」

まつたぐ、ここは。親の気持ちも知らん。

「アホ。確かにギャラドスは強いが、お前がそれを引き出せなきゃ意味ないんだぞ」

「つー、わかつてるけど……父ちゃんの教えてくれる『』ってなん

だか難しいし、つまらないんだもん

つまらん、か。まあ確かに面白くはないだろつなあ。正面から言
われるところむけだ。

初心者な息子に会わせて、あまり踏み込んだ話はしていないもの、バトルにおける戦術やポケモンの育成に関する理論の基礎、旅をするなら重要な、ポケモンセンターのマナーに活用法なんて聞いてるだけじゃそう思ひづのも無理はないとは思ひつ。

特に私の教える戦術なんてテレビで流れている既存のものと比べれば派手さが無いし。

今も、ドラゴン使いで有名なワタルという選手がギャラドスのハイドロポンプで相手のエレブーを気絶させた。

私の教えるバトル理論なんて突き詰めれば将棋みたいなもんだし

な……。

それでも、そのときが来るまで息子にトレーナーとしての心構えやらなにやらを身につけておきたい。

さすがに初めての挑戦でプロになれるとは思わないが、途中で旅費が足きて強制送還なんてことにはならないようだけでもしてやりたい。当人からするとあれはかなり恥ずかしいらしい。

「うおおお、ワタル、かっけー！」

画面を見つめる息子の瞳はいつものように輝いてるに違いない。
こちらに向いたその小さこ背中は世間の厳しさで潰れてしまわない
だらうか。

いや。案外、驚くほど大きくなつて帰つてくるかもな。あの人の

子どもなんだから。

「あんまり画面に近づきすぎるのも危ないなよー。田が悪くなるぞー」

さて、どうあえず野菜を洗うか。

፳፻፲፻

流し場の前に立ち、腕まくりをしたところでポケットから聞きなれた電子音が。

「ん？ ポケギアに……メールか。相手は……あらま、シゲル君とは珍しい」

息子とよく遊ぶシゲル君には、こぎわと並んでそのためにこのポケギアの番号とアドレスを教えてある。

しかし、彼から連絡が来たのはこれが初めてだ。

一 な に な に へ え 「

なんというか、予想外な内容ではあつたが……悪くない。

ちょうど、息子の再び伸び始めた天狗の鼻を叩き折るいい機会になるかもしれない。

息子が「コイキングをギャラドスに進化させてから2週間。

息子にはトキワまでならば一人で遊びに行つてもいいと許可を出した。

まだ早いかとも思ったが、せっかく進化したギャラドス。

好奇心旺盛な息子がいつまでもコイキング相手で満足できるはずも無く、また私の帰りをおとなしく待つてていられるはずもない。

それならばと、先に制限を設けたうえで許可したのだ。

そして許可を出した途端、息子は毎日門限、ギリギリまで1~ばんどうろへ遊びに出かけるようになった。

毎日どこかしらに小さな怪我をして帰つてくるが、楽しくてしかたないようだ。

驚くことにすでにりゅうのいかりを習得させたようだ。コイキングのときの成長速度と比較すると段違いである。

……旅に出るときにはハイドロポンプとかはかいこうせんとか覚えてやしないだろうな。

いや、それはないか。このあたりのポケモン弱いし。ゲームで言うところの経験値も少ないはず。

すでにギャラドスの成長は伸び悩み始めているし。息子はギャラドスで無双するのが楽しくてまだ気付いていないが、そろそろそのことを感じ始める頃合だらう。

うん。息子に勉強に対するやる気を出させるには、やつぱりライバルの存在が一番手っ取り早いな。

シゲル君に了承の返事を送る。

すぐさま感謝のメールが届いた。うーむ、つちの息子と同い年だといつこのこの行動力と危機感、そのうえ律儀。出来た子だなあ。

おおつと、ワタル選手のギャラドス、はかいこうせんの反動で動けないっ！ そこへスリーパーのサイコキネシスが炸裂うつうう！

「が、がんばれ！ 負けるな！」

「やつたー！」

白熱する実況中継ではしゃぐ息子を見ていると、やはりどうにも比べてしまつ。子どもっぽいといふか。いやいやまだ8才だし、うちのこは年相応でシゲル君が早熟なだけか。

でも、あと1年と少しで一人旅させるわけだし……うーん。

まあ、あの人もふだんはこどもつぽいというか、天然なところが多分にあつたし、大丈夫といえば大丈夫なのかもしれないけど……。

とりあえず、やるだけやってみるか。うまくいけばシゲル君が息子からやる気をひきだしてくれるはずだ。

「ルルちゃん、試合終わったけど、ぬしせー？」

「アガルタの魔術」を題材とした「魔術」の解説

ああ、なんにしろ今は晩飯の準備が先だな。

私は、むくれる息子のうらみがましい視線をなんとかするために野菜との格闘を再開した。

あんまり切りがよくないうえに少し短いですが、ちょっと時間がと
れないのでとりあえず出来たといつまで。

シゲル君もお父さんも色々思つところがあるみつです。

申し訳ないですが、感想の返信ももう少し待つてください。

オー・キド・ポケモン研究所 実験室

マサラタウン。とくにこれといった特徴のない、良く言えばのどかな、悪く言えば田舎の町。

この町は町はずれに研究所がひとつあるのみで、他に田立つものは何も無い。

が、その唯一このマサラで田立つている研究所こそが世界的に有名な携帯獣学の権威、オー・キド・コキナリ博士の研究所であることは意外と知られていない。

「ふーむ。金色のコイキングというだけでも興味深かつたが、進化すると赤くなるとはのう。ぜひとも一度じっくり調べてみたいもんじや」

「調べるって何すんのさ爺さん」

「そりや一日の食事量や睡眠時間が普通のギャラドスと違うのかとか、うろこの手触りも同じなのかとかひづの長さを計つてみたりと、色々あるわい」

出来るだけ自然な状態のポケモンを研究したいというオーキドの考えに基づいて設計されたこの研究所は、ポケモンを放し飼いできる広大な敷地と小規模な実験棟で出来ている。

その小さめな実験棟の一室でオー・キド博士とその孫、シゲルが話をしていた。

内容は最近マサラで話題の赤いギャラドス。

「しかし、わずか8才で『コイキング』を『ギャラドス』に、それも他のポケモンの助けなく進化させると、サトシ君は凄いの？」

そして、その『ギャラドス』の使い手で若干8才にして『コイキング』を『ギャラドス』に進化させた天才トレーナーと噂のサトシについてだつた。

「たしかに凄いとは思つたが。サトシは毎日、頑張つてたし……まあ、俺だって本当に進化をせんとは正直思つてなかつたけど……もしかしたらとは思つてたよ？ あんだけ毎日バトルしてれば進化しても普通じゃないの？」

少し面白くなれりにシゲルが言つた。

「うーむ。まあ、普通はそんじやが、実は『コイキング』が『ギャラドス』に進化する過程については学会でもよくわかつておらなくてのう。十数年間育て続けても大きくなるだけで進化しなかつたという例もあるんじや？」

「え、そうなの？ でもサトシは『コイキング』が絶対に『ギャラドス』に進化するつて信じてたぜ？」

するとオーキド博士は驚いた顔をした。が、それは一瞬のことだ向かい合つて話すシゲルにも気付かれなかつた。

「ほー。もしかすると自分のポケモンのことと信じるサトシ君に『コイキング』が応えたのかもしれんの」

真面目な口調ながら、かく茶目つ氣を含ませたオーキドの言葉にシゲルは反応した。

「なに、そんなことあんの？」

「つむ。進化と「うのはポケモン」と「条件は異なるんじゃが、いくらか共通していることがあっての。それはある程度のバトル経験じゅつたり、特殊な鉱石との接触反応だつたりするんじゃが、その中にポケモンの意思もあるようだというのが最近の学説にあっての。それによれば、ポケモンが進化したいと思っているかどうかが進化への鍵になるそんなんじゃ。じゃからコイキングがサトシ君になついていて、彼の思いに応えたいと思ったのならばそういうたの可能性もあるかもしれん」

「あの口をパクパクさせではねるだけで何考えてるのかさっぱりわからないコイキングが？」

「つむ。じゃから、もしそうなのだとしたらサトシ君はポケモントレーナーとして凄い才能を持つておるかもしれんのう。こりや再来年の旅立ちが楽しみじゃわい」

「……」

うむうむ。と感心した様子の祖父を前にシゲルは複雑な感情を抱いていた。

親友が認められるのは良い。それにともなつて彼が人気者になるのも、まあいい。サトシにトレーナーとしての才能があるだろう」とも認められる。

それらはむしろ彼のことを親友だと思っている彼からすれば喜ばしいくらいだ。

ただ、それを自分の祖父が褒めていることがなんだか悔しかつた。

実は、多少乱暴な言葉遣いをしていても彼は自分の祖父のことを尊敬していた。

自分の祖父がマサラで唯一の有名人であることも誇らしかったし、ポケモンとの共存を真摯に、そして真剣に研究するオーキドの理念はとても素晴らしいものだと思っている。

何より、田中、共働きで両親が居ないとき、姉のナナミの次にシゲルのことを構ってくれたはオーキドだった。

普段、意識などしないし自覚もそれほどなかつたが、彼は結構なおじいちゃん手なのだ。

そんな尊敬する祖父がサトシを褒めている。シゲルは自分が同じようにおーキドから褒められたことがあったか思い返してみるが、そんなこと一度もなかつた。

自分は尊敬する祖父の孫である。それなのに祖父に先に認められたのは自分ではなくサトシ。

それがなんだか面白くない。

彼自身はまだわかっていないが、正確にいえば妬ましいのだった。

「……なあ、じいさん」

「なんじや、シゲル？」

「俺もポケモンもらえないかな？」

「うーむ……わしはポケモンを持つのには早いことは無いと思つんじやが、こればかりはのう。マサラじゅう昔からの決まり」とじゅうじゅう、町長の兄でもムリヤリ変える出来ないじゅうじゅうなあ

オーキドの答えを聞いたシゲルは小さく「せつか」と軽くと肩を落とし、田に見えて落ち込んだ。

そんな孫の様子にオー・キドが声をかけた。

「ふむ。シゲルよ、自分のポケモンが居ないからと言つてポケモントレーナーとしての修行ができぬわけではなかりつへ。」「え？」

「ポケモンをえいればトレーナーは召乗れる。じゃが、上を団指すのならばそれだけでは足りん。バトルを重ねてポケモンを強くするのも上を団指す方法のひとつじやが、それだけでも足りんよ。ポケモンだけでなく自分も強くならねばな」

「自分も？」

「ひむ。プロのトレーナーや強いトレーナーは皆自分も磨く」とこ貪欲なんじやぞ。そしてトレーナーとしての強さは知識と経験じや」

「知識と経験……」

「やうじや。どのよにポケモンと関わることしても、自分のポケモンの面倒を見るのは自分じや。食事、トレーニング、育て方ひとつとってもすべてトレーナーが決めねばならん。ましてポケモンを強く育てたいのなら、それなりの育て方を考える必要があるじやうじ。それには知識と経験が必要じやうじ。これはバトルにも言え

る

そのままで言つオーキドは顎に手を当てて答へるよつとして続けた。

「つむ、経験は旅に出るのが一番じやな。じやが知識に関しては旅に出ずとも薦えむ」とが出来るじやうじ。

「知識か……なあ、それは爺さんが教えてくれるのか？」

このオーキドの助言は彼自身が昔凄腕のトレーナーだったことから来ているのだろう。そしてオーキドが凄腕トレーナーだったことを知っているシゲルは期待を込めてきいたのだが。

「つーむ、それでもいいんじゃが……」

言葉尻を濁すオーキド。直後、どこからか彼の助手の声が聞こえてきた。

「教授！　まだ休憩中ですか！？　ちょっと来て欲しいんですけどっ！」

「とまあ……最近は研究が忙しくてのう。ちょっと教えてやれそうに無い」

「じゃあ、どうこういつのせい」

「つむ。実はひとつじるあたりがあつての」

「じるあたり？」

「そうじゃ。以前、わしがタマムシ大学で教鞭をとつていたときの教え子が近くに住んでいての。彼に教わるといい。学者ではないがトレーナーとしての知識ならばプロでも通用するほど持つておる。さらにポケモンバトルに関してならばわしの知る限り右に出るものはおりん」

シゲルは心底驚いた。またか自分の祖父にここまで言わせる人物が

居るなんて。それもすぐ近くに。

「だ、だれ？」

「ハマサキ君、じゅよ。いやあ、彼の卒業論文は非常に興味深かつた。まさかわしの提唱したタイプ別分類法にあのよつたがぶせてくるとは思わんかった」

「……ハマサキ？」

「なんじゃ？」
「わからんのか。今せつ お話題に出たサトシ君のお父さんじゃよ」

「ええつ！？」

「まあ、当然彼も自分の息子」トレーナーとしての知識を授けたる
じやうづが……」

「教授ーー！？ まだですかーー！」

そのとき、再び助手の先ほどよりも切羽詰つた声がした。

「サトシの父ちゃん……」

「まあ、わしとしては強制する気は無いから。おぬしの好きにするといい。ひょっとすると友達と遊ぶ時間を減らすことになるかもしけんし、そもそも引き受けてくれるかもわからん。第一、今から学ぶことに早すぎるということはないが、旅に出てからでも遅すぎ

るわけではないからの」

「……」

「じゃが、何もせんでおればそれまでの間に多少の差ができる」と
も確かじや。よく考えて決めなさい」

「うん」

「それじゃワシはもういくぞい。いい加減助手がシビレを切らして
おるじやうつし。シゲルもそろそろ帰りなさい。ナナミが心配して
しまつから」

やつ語うとホーキッドは部屋を出て行つた。

一人残されたシゲルは黙つて考えてみた。

果たして、自分はどうするべきなのか。
このままでは親友においていかれる。そして、祖父の感心もサトシ
に向き続けるだろう。

(……なんだ。考えるまでもないじゃないか)

そうしてシゲルはポケギアを取り出した。頼る相手がサトシの父親
だといつことに若干の抵抗を感じないわけでもない。
けれど、このまま置いていかれるのだけは嫌だつた。

島子ヒライバル 2（後書き）

予定していたよりずっと時間が空いたので続きを書いてみた。シゲル君と初登場オーキド博士のターん。台詞や口調を再現できるかどうかばかり気にしていたら、地の文が……。

オーキド博士ってこんな感じ……でしたよね？ うーん。

マカラタウン 自宅前

日曜日。

「いってきまーす！」

「おー、氣をつけるんだぞ。ギヤラドスが疲れ始めたらすぐ帰つてくるように」

はーい、と元気な返事を残していちばんどりびくと走つていく息子。元気が良いのは結構なのだが……。

息子は今日も今日とギヤラドスと野性。ポケモン相手にレベル上げに精を出している。

今日は私も久しぶりの休日だったので家に居たのだが、先に息子から同行を断られてしまった。

（まあ、今日はシゲル君にポケモントレーナーのいろはを教えてあげる約束だったからむしろ都合がいいんだが……、少し寂しいような）

シゲル君に先生になつてくれと頼まれた私は、休日の時間が空いているときでいいならと請け負つた。

その際、シゲル君から出来れば息子とは別で教えて欲しいというお願いがあつた。

私もちよつとした思い付きから、しばらくは一人を別々に教えるつもりだったのでそれもまた了承した。

「さて。忘れ物は……よし、ないな。つと、授業用にポケモンを用意するのを忘れてたか。オーキドさん家に行く前に教授のところに行かないとな」

仕事の合間を縫つて少しづつ作成し、昨晩仕上げた自作テキストの入ったリュックを背負う。

ふと玄関の横におかれたクーラーボックスと立てかけられた釣竿に視線が向かった。

（昔は休日となれば釣竿片手に海や川へと繰り出していたけれど、マサラに引っ越ししてきてからは「無沙汰だなあ。手入れはしてるけど、そもそも使ってやらないとな」）

ま、また今度だな、と呴いて私は玄関を出た。

マサラタウン オーキドモ シゲルの部屋

ゲーム機は出しつぱなし、読んだ漫画雑誌は床に散らばり、引つ越したときの荷物がまだまだダンボールに入ったままの息子の部屋に比べ、シゲル君の部屋はとても整理整頓が行き届いていた。

シゲル君がやっているのか、それともご家族がしているのかはわからないが、あまり子どもの部屋っぽくは無い。

机の上に置かれたポケモンの人形と並べられたいいくつかの漫画雑誌くらいだ。

ちらりと田に入った本棚にはオーキド博士の著書（わかりやすく書かれてはいるがとても8才で読むものではない）と、ポケモンの簡単な図鑑（有名なポケモンを30種類くらい載せただけの子供向け）が隣り合って刺さっていた。家具や壁紙が全体的に緑色を基調としていて落ち着いた感じがする部屋だ。

（ううの息子とはずいぶん違うなあ……）

なんとか、持ち主の性格や嗜好が良く現れている。

「あのー……」

おっと。

正面に座るシゲル君が居心地悪そうだし、さっさと始めるか。

私はナナミさんの用意してくれた紅茶を一口飲んで本題に入った。

「さて。このあいだ貰ったメールにはポケモンのことを教えてほしいって書いてあつたけれど、シゲル君は何を教わりたいんだい？」

「え……何をつて、トレーナーとしての知識つていうか、強くなるための方法とか……？」

「うーん、それじゃあ漠然としそぎてて、ちょっと教える側としては困るかな」

「じゃあ、いつもサトシには何を教えているんですか？」

「サトシに？ そうだねえ。一番時間を割いてるのは一般常識、かな？ 次に旅で困ったときの対処法とか

「……え？ バトルについては教えてないんですか？」

「ああ、それももちろん教えているよ。ただ、それほど重要じゃないからね。それほど時間はかけてないかな？ 最低限、バトルに負け続けて路銀を失つて強制送還なんてことにならなければいいから」「でも、爺ちゃんからはおじさんがポケモンバトルの達人だつて聞きましたけど……」

「ああ。教授はそういう風に私のことを紹介したのか」

どうも教授と私で認識に差異があつたようだ。それほど問題ではないのだが、自分があつちの世界での知識をこつちの世界で無意識のうちに当てはめて考えてしまつていたと思うと、少し鬱にれる。（と、なるとシゲル君には直接訊かないといけないな）

少し悩んだが、結局訊くことにした。

「……シゲル君は何になりたいんだい？」

「え？」

おそらく教授はシゲル君がサトシや他の子どもと同じくポケモンマスターに憧れていると思つていてのだろう。けれど私は決めてからないで本人に訊くことにした。

それはあつちの世界で、彼とよく似た境遇で異なる未来を歩んだ彼にとてもよく似ている人物が出てくる物語を知つていたからだ。……、これも決めて掛かっているのと同じだな。

「いやね。うちのサトシはポケモンマスターになりたって言つてるでしょ？」

ポケモンマスターはプロリーグで優勝した人のことだから、まずはプロのトレーナーになることを目指さないといけない。

そして、ポケモントレーナーになるならサトシは10才で旅に出るつもりだと思うんだ。これはシゲル君も知っているとおり、このカントーでプロのトレーナーになるためにはバッジを8個集めて、ポケモンリーグで活躍しなきゃいけないからね。そして大会の参加資格は11才からで、マサラのポケモンの所持が認められるのは10才から。まあ、トレーナーを目指す子どもにはポケモントレーナー協会から助成金が出るから、トレーナーを目指す気はないけど旅に出るつて子どもも多いけど」「

むしろ、暗黙の了解というか、協会も取り締まろうとしないから子どもはみんな旅に出るという風潮が出来てしまつていて。まあ、トレーナーになるにしろ、ならないにしろ、若いうちに旅に出て見識を広められるのはいいことだとは思うので私としても特に文句は無い。

軽い留学、みたいな感覚が近い。

「だから、僕はバトルもそつだけじ、トレーナーとして旅をする際に必要な心構えや常識なんかを先に教えてるのだけど」

そこで一端言葉を切り、紅茶で口を濡らす。久々の長話だからか口が渴いてしまう。……この紅茶、いい香りだ。

「ねえ、シゲル君。君も家のサトシみたいにプロのトレーナーになりたいのかい？」

「……俺は」

「君が勉強したいという動機はメールに書いてあつたから知ってる。サトシに置いてかれるよつた気がするだとか、おじいさんがサトシを褒めて悔しいだとか、普通は中々他人に言えることじゃない。それだけでも十分な動悸だし、本気で頑張りたいんだって気持ちも伝わってきた。……でも博士に認められたいのなら何もトレーナーにな

ならなきゃ いけないわけじゃないし、サトシに追いつくのにしたつて、何も同じ道を進む必要はないんだよ？ むしろ他の道を歩いて頑張った方が早いかもしれない。

多くの人は確かに助成金制度を利用して旅に出るけど、別に将来なりたいものがあるのならまっすぐそれを目指してもいいんだ。将来なりたいものによつては旅に出るよりじっくり勉強していったほうが早いものもあるし

8才相手に進路相談をするのも我ながら気が急いでいると思うけれど、この世界じゃ総じて若いうちに将来の人生設計を決めてしまう人が多いので、割と不思議な光景ではなかつたりする。

まあ、子どものうちにポケモントレーナーを目指して旅に出て、挫折して他の道を探すつていうルートが多いんだけれど。

「シゲル君。一度よく考えてみると。君が教わりたいというのならオジさんはオジさんが知っている限りのことを教えてあげてもいい。けれどその分、時間も使うし……はつきり言ってスバルタだ。うちの息子に関しては親として育てるから息子の好きにさせていいところがあるけれど、君の場合は私の弟子になるんだからね」

実は自分が知っているバトル理論を誰かに伝え残したいという願望が私はある。ただ、それを望む人が居なかつたので誰に言うこともなく、今日まで来たのだが。

息子に無理に教える気も無い。自分の望むものを選び取れる人間になつて欲しいし。

何も与えないのではなく、必要以上に「え過ぎることのない教育が私の考え方のだ。

シゲル君は黙つて考え込み始めてしまつた。おそらく生まれて初めて真剣に将来を考えているのだろうな。

(「いや、急かすのはよくないな）

出来るだけゆっくりと、邪魔をしないよう紅茶を一口する。

それを何度も繰り返し、とうとう紅茶になつたカップをソーサーに戻したときシゲル君は顔をあげた。

「……おじさん。おじさんの話、俺にはちょっと難しかつたけど自分なりに大人になつたら何になりたいか考えてみたんだ。そしたら俺さ、爺さんみたいなポケモンの研究者になりたいみたいなんだ」

「……そつか」

「でもやー。」

「うん？」

にかつと笑顔で続けるシゲル君。それはうちの息子と同じ年なのだと気付かれるほど口説の無いものだつた。

「ポケモンマスターになりたくないわけでもない、みたいななんだよね。それにさ、サトシにポケモンのことで負けるのも嫌だ。じいちゃんも、若いときは凄腕のトレーナーだつたって聞いたことがあるし」

「つまり？」

「うん。だからさ、全部田舎しちゃだめかな？ サトシに勝つのも、じいちゃんに認められるのも、ポケモンマスターになるのも、じいちゃんみたいな研究ある者になるのもー。」

「……あー、まあ、いいんじゃないかな？ まだ若いし」

予想外な答えだった。

どうもシゲル君のことを息子に比べて大入っぽいと感じていたからか、選ばせるような言葉になってしまっていたようだ。

そのことに気付かされる。

子どもだからいいの発想。

全部乗せ。

無理とか無謀だと、そんなつまらないことを気にしないで良い年齢だからいいと選べる選択肢。

「うそ。だから、おじさん。俺にポケモンバトル教えてください。」

「……オジさんは厳しいよ？ シゲル君のレベルに合わせた授業をやるナビ、やつとそれでも泣きたくなるくらい」

「うう、それでサトシに勝てるな」

「まあ、今のサトシなら余裕だろうね。むしろサトシと言わず、ホウコンリーグ優勝くらいはしてもらわないと」

「マジでー。」

田をまんまるにして驚くシゲル君。まあ、そのくらいはあるけれども

自力でしてたんだから余裕だろ？

「まあ、テレビで見るような見栄えのいいものじゃないけれど、勝ち負けだけを考えるならプロリーグでも通用するとは思うし。トップがワタル君程度なら確実にいけるんじゃないかな」

途端に胡散臭い表情になつたシゲル君。なんだ？

「……そこまで？ じいちゃんが褒めてたから本当に強いんだとは思つけどさ。カントープロリーグチャンピオンで、伝説のドラゴン使いって呼ばれてる天才のワタルを下に見れるほどなの？」

うわあ、これは全然信じてない眼だ。疑わしいって感情がふんふんするよ。まあ、私は見た目じゃただのメタボなおっさんだしな。新進気鋭のワタル君と比べたら見劣りするのは当然か。

「まあ、多少言い過ぎたところもあるけれど、おおむね間違つていなさい。そうだな……今日は授業をする前にそれを証明しておいつか

クエスチョンマークを浮かべるシゲル君に向かってきなさいと言つて部屋を出で行く。

慌てて追いかけてくるシゲル君。

一階でくつひいでいたナナミさんに挨拶と紅茶のお礼をして外へ。

ついでにポケギアでメールを送り確認を取つてみる。お、あいかわらず返信がはやいな。

ちよつと最初の予定とは違うナビ、まあいいか。

私はモンスター・ボールから、先に入れ替えておいたペリッパーを出すとその大きな口の中にシゲル君を放り込んだ。

「うわあっ！？ なにすんだ、うわ、くさっ」

なんか聞こえるけど気にしない。私はこれも修行のうちだ、なんて囁きながらペリッパーの足に捕まつた。

「頼むぞ、ペリッパー。そらをとぶ！ 行き先は」

セキエイ高原だ！

そういうや、テキスト使わなかつたな……まあ、次回でいいか。

どうしてこうなった。

セキエイ高原 スタジアム

リーグ開催時期は人ごみでごった返すスタジアムも、今は人気もなくだだっぴろいだけ。

その広い空間を一人の人間が独占していた。

中央に備え付けられたステージリングでポケモンバトルをする一人の男。

その唯一の観客であるシゲルは口を半開きにして、そのあり得ない光景を見ていた。

まず開始早々、ギャラドスが10万ボルトでフィールドに沈んだ。すぐさま現れた次鋒のブテラも何かをする間もなくreiとうビームで氷漬けになった。

次に出てきたリザードンとバンギラスはなみのりで場外に運ばれた。

「……で、ワタル君。今日こそ私に勝つと言つていたが、ここまで前回と同じ展開じゃないか。いや、むしろ弱くなつていないかい?」

呆れ顔のハマサキに対し、悔しそうな顔を浮かべる対戦者。

それはとても奇妙なものだった。

ハマサキの対戦相手はカメラ栄えしそうなマントつきの派手な衣装に身を包み、長めの髪を某野菜人のように逆立てている。

その特徴的な見た目はどうあがいても見間違いようもなく、ポケモンリーグ本部セキエイリーグチャンピオン、通称ドラゴン使いのワタルのものだ。

両者の浮かべた表情が逆ならばまだシゲルにも理解できなくもない。

が、現実にはそこらへんに有象無象といる釣り人にしか見えないハマサキがチャンピオンよりも優勢に立つてゐるという驚きの光景なのだった。

「くつ、対先輩用に新しく育てたポケモンたちだつたんですけどまだレベルが足りなかつたみたいですね……。相当鍛えたつもりだつたんですけどれど」

「うーん、確かに弱くはなさそつたけれど前に戦つたパーティのほうがレベルは上だつたね。でも、君が私に勝てないのは根本的にレベルと相性の問題だし。使うポケモンの種類を変えるかレベルで上回らない限り、多少の対策は無意味だと思つよ」

少なくとも性格の厳選と努力値振りを行つてゐる速攻型スタークーを相手に努力値計算をしていないドラゴンポケモンで勝つのならば、まずレベルで劣つていては話にならないぞとハマサキは考へているのだが、努力値の仕組みを理解していらないシゲルとワタルには察することができない。

「うう……カイリューを2体減らしてリザードンとバンギラスを入れたのに」

「いや、こいつがスタークー出すつてわかつてゐんだから水が弱点

「ポケモン入れてどうするの？」

「先輩のスター・ミーじゃなければみずタイプのなのりだって耐え切れるんです！ 先輩のスター・ミーが非常識なんですよ！ なんなんですかその素早さと技の威力は……」

実際、プロリーグでカンナと当たった際に、その2匹でワタルは勝利していた。だからこそ自身があつたのだろう。

「いや、まあ、そうだつたとしても、そのあとはどうするの？」
「はかじこうせんで仕留めます」

「……はあ
「なに、ため息ついてるんですか先輩！」

「いや、相変わらずだなあと」

（まるで成長していない……なんてことは無いけれど。手持ちにはかいこうせんを覚えさせたがるのはまだ治つてなかつたのか）

「……その余裕もここまでです。次のポケモンこそ先輩対策に育てたとつておきですか？」

「お、ちょっと楽しみ」

「ええ、泣くほど楽しんでください！ 現れる！ キングドラゴン！」

ワタルがステージの上に投げたボールから出てきたのはみずタイプとドラゴンタイプを併せ持つキングドラ。

たつのおとしごに似たフォルムで、進化前のタツツーやシードラに比べると遙かに大きく威圧感のあるポケモンだ。

明確な弱点がドラゴンタイプしかないように、はがねタイプの威力を半減、みずとほのおに至つては4分の1という優れた耐性を持つ。

種族値的にも突出したステータスを持たないものの、すべての能

力がやや高めにまとまっている。

それでいて使用できるわざも強力なものが多い。

「おー……。まあ、予想の範疇、ではあるかな」

「その反応、ちょっと期待していたものとは違いますが、まあ先輩ですしにめます。ですが勝負は勝たせてもらいますよ！ キングドラ、あまごい！」

もつたいくつて出したものの、ハマサキはあつさつとした反応しか示さなかつた。不満はバトルで解消するとばかりにキングドラに命令するワタル。

「む、すいすい持ちか？ スター＝ミー、でんじは！」

すいすいという特性を持つたポケモンは雨天時にすばやさがある。先手を取られては何かと面倒だと考えたハマサキは先手の取れるうちにまひ状態にしてしまつことにした。

「ちつ、避けるキングドラ！ ああつ！？」

「よしつ、スター＝ミー、れいとうビームだ！」

スター＝ミーの赤い核から瞬時に冷却エネルギーを伴つた光線が放たれる。

それはキングドラの腹に直撃し、その周辺を凍らせた。だがそれ以上広がらない。

キングドラは倒れることなくスター＝ミーの攻撃を受け止めたのだ。身震いだけで氷を剥がし落とし、反撃の準備に入つてゐる。

「くつ、キングドラ！ りゅうせいぐん！」

「避けるんだスター＝ミー！ 当たりそうなのはれいとうビームで押し返せ！」

キングドラの体から不可知のエネルギーが立ち上る。そしてキングドラの眼がギラリと光つたかと思った次の瞬間、空から大量の隕石のようなものがステージに降り注いだ。

ひとつひとつは決して大きくない。精々がサッカーボールくらいだろうか。が、赤く燃え滾ったそれが高度から大量に落下してくる見た目の恐ろしさと、ドゴンッドゴンッドゴンッと断続的な衝突音がステージに響くたび、クレーターが出来ていく様は衝撃的だった。

観客席に座っていたシゲルですら度肝を抜かれた様子で椅子から転げ落ちていいほどだ。

一方、ステージの上で降り注ぐりゅうせいぐんを必死で避けようとするスター・ミーだが、運悪く逃げる方向すべてが流星の着弾地点となっていた。

着弾の余波で、行動を遮られが身体が鈍る。そこへ最後の一発が直撃した。それは赤い核を見事に打ち抜き、スター・ミーの身体を場外へと吹き飛ばした。

「うわ、急所にあたった……、ええ！？ そいつスナイパーかッ！」
？

倒れ伏すスター・ミー。レベル差を考えればギリギリで絶えるだろうと思っていたハマサキの予想は読み違いで外れていた。

「どうです先輩。俺だつてはかいこうせんばかりじゃないんですよ？ だてに本部のチャンピオンやつてませんつて」

「うーむ。確かに驚かされた。けど悪いな。この試合、たぶん私の勝ちだ」

立つた自分のポケモンが倒されたばかりだといつのに、本当に申し訳なさそうに言つハマサキ。

「勝利宣言にはまだ早いですよ。僕はキングドラを含めて2匹。先輩もあと2匹でしょう」

6対3。手持ちを6匹つれたチャンピオンに釣り人がわずか3匹の手勢で挑む。何も知らない人が失笑ものだ。笑い話にもならない。けれどハマサキはこのルールで今のところ一度もワタルに負けたことが無かった。

それどころか最初の一匹目を倒されたのですら今回が初めてのこと。

毎回、一匹目に出す速攻型スター・ミーにワタルは負けていた。ドラゴンタイプに拘るワタルが自分の弱点を知らないはずもなく、スター・ミーの弱点である10万ボルト、その長所を失わせるでんじはをポケモンに覚えさせてある。

……だが、種族値と性格に恵まれ努力値を計算して振ったことで プテラですら及ばない素早さを手に入れたスター・ミーがどうしても抜けなかつた。

しかし、今回は今までとは違う。あの散々辛酸を舐めさせられた忌々しい星型の悪魔はキングドラの前に倒れた。

そしてワタルはまだ自分が最も信頼する切り札を温存している。相手があの悪魔でない限り、チャンピオンになつてからは無敗のポケモンだ。

「確かに数の上では同数だが……ワタル、お前の最後のポケモンってどうせカイリューだろ?」

ワタルが最も信頼する切り札。それが最低でも75レベル以上はあるだろうカイリュー。

そのことは周知の事実であり、自分とのバトルで彼がメンバーから外すわけがないだろうという読みだ。

「こまわり隠すことでもなく、ワタルもそれを認めた。

「ええ、まあそうですが」

「で、そのキングドラが持つてゐる四つ田のわざは、はかいこいつせん
だと思つんだがどうだ?」

「だとしたらどうだつて言つんですねか」

「いや、これが勝ち抜き式でなければわからなかつたんだけじな。
まあ、そのなんだ。先に謝つておく。すまん。……出番だ、ヌケー
ン」

「……なんですか、そいつ?」

現れたのは表情の読めない黄土色の……おやじくむしタイプのポ
ケモン。

足は無く、ふよふよと宙に軽く浮いてゐる。羽はあるようだがま
つたく動いていないのでそれとは異なる、何か別の力で浮かんでい
るようだ。

現れたきり身じろぎ一つかむ」となく宙に浮かんでゐる。

「あら? ワタル、お前チャンピオンのくせにこいつを知らないの
か?」

「お、俺にだつて知らないポケモンくらいこりますよー。世界じゃ毎
日のように新種が見つかってるんですから」

「……まあ、こいつの入手法を知つてる奴なんてそう多くはないし
仕方ないかもな。じゃあ、ワタルいい機会だから覚えておくといい
ぞ。ヌケーン、つるぎのまいだ!」

「キングドラ! 積まれる前にハイドロポンプで吹き飛ばせ!」

ヌケーンが宙を舞う前に、キングドラのハイドロポンプがその身
体にヒットした……ように見えた。

ヌケーンの身体を圧縮された大量の水がすり抜けていく。

「じつにいじだー？ なんで、キングドラのハイドロポンプが…」

「よし、ヌケーンもいこうかよつねーのまー」

「へい、はかこいわせんー！」

キングドラの口から圧縮された無色の光線が放たれるが、またもやヌケーンの身体をすり抜けていく。

「ああ、ここ忘れてたがこいつゴーストタイプ持ちのむしポケモンだぞ」

「…………いや、だとしてもハイドロポンプがあたらないのはおかしい……キングドラ、いきなせいぐん！」

「まあ、他に手がないなら妥当な選択だが、それも無駄なんだよな。ヌケーン、かげぶんしんだ」

キングドラの呼び寄せた流星がヌケーンの周囲に降り注ぎ、そのうちいくつかは直撃もした。

しかし、攻撃が終わってもヌケーンの姿は変わらずそこにあった。そしてひとつとヌケーンの身体がぶれていく、やがてヌケーンそつくりの分身がステージに現れる。

「なんでいじかがないんだ……？ かげぶんしんが先に発動したわけでもないのに？」

「こいつのとくせいや。ふしきなまもりつて言つんだが、こいつがばつぐん以外じゃダメージを受けないつていうものでな」

「なんですかそれ。反則じゃないですか」

「まあ、だから先に謝つたじやないか。すまんつて。まあ、代わりにどんな攻撃でも食らえば一撃で沈んじまうんだがな」

「ぐつ、俺のキングドラじゃどうあがいても倒せないってことか」「そういうこと。もうそろそろいいかな？」スケニン、シザークロス！

「……戻れキングドラ。お前はよくやつたよ」

勝る素早さで逃げ切ろうとするキングドラだったが、シャキーンシャキーンと両サイドから迫り来るヌケーンとその分身に追い込まれ、ついにステージの上へと倒れ伏した。

キングドラをボールに戻して労うワタルだったがその表情はなんともいえないものだつた。喜んでいたら、そこに水をかけられた。これが実力ならともかく相性での完封であつたため、なんだか釈然としないのだ。

「先輩の使うポケモンはあいかわらずエグイのばっかりですね」「おいおい、人聞きの悪いこと言つんじゃないよ。こんなもんでエグイなんて言つてたら世の中やつていけないぞ？」

「そんな台詞を本部のチャンピオン相手に吐けるのはあなたくらいですよ」

そう言つてボールをステージの上に投げるワタル。現れたのは大きな身体とそれを持ち上げるこれまた大きな翼を持つたポケモン。強大な力を秘めていながら愛嬌のある顔立ちとおなかの縞々がチャーミング。

「お、出できたなカイリュー」

「ええ、じつかがばつぐんならダメージは通るんですよね？ ならカイリューそらをどぶこづげき！」

「おつと、分身のほうに突つ込んだか。本来ならここでバトンタッチせたいんだが、勝ち抜き戦だからな。ヌケーン、シザークロス

で迎え撃て！」「

バサツと空中に身を翻し、一回転すると翼を大きく広げて止まるカイリュー。大きくバンツーと空気を翼で叩き、高速でヌケーン田掛けで落下していく。

選んだのはワタルにとつて運良く、本体のほうだった。

対するヌケーンはシザークロスの構えで迎え撃つ。

しかし、すばやかで劣るヌケーンはシザークロスを放つ前に、落下してきたカイリューの爪が先にかすり倒れてしまった。

「ついに最後の一戦、ですね。あなたに負けてから修行に明け暮れ、6年。チャンピオンなつてもあなたには届かなかつた。けれど、それも今ここで終わらせる！」

手元に残つているポケモンは一番信頼しているカイリュー。

「まあ、なんだ。盛り上がつてゐるといひ悪いけど、あえて言わせて貰おう」「

『ユウ！

「10年早い」

悪魔、再臨。

セキエイ高原　スタジアム内ポケモンセンター

バトルを終えてセキエイのポケモンセンターの待合室。バトルで傷ついたポケモンたちを回復させるために預けたところだ。

ワタル君とのバトルはいつもの「とく私の勝利で終わった。

最後にもう一匹のスター・ミーを出したときの彼の表情は筆舌にいくしがたい。

あんなにもスター・ミーがトラウマになっていたとは知らなかつた。まあ、大学時代に出会つたときから同じように倒していればこうもなるか。

「まあ、アイテムの使用と所持が禁止つてルールでやつたらどうしてもこうなつちゃうつて」

「ですが、どうしても俺はドラゴンポケモンであなたに勝ちたいんですね！　故郷の誇りと伝説のドラゴン使いとして！」

「なら、もう少しパーティのコンビネーションを考えないと」

「ですが、そのコンビネーションを發揮する前にやられてしまつてしまつ……」

「タイプ一致でもないうちのスター・ミーのれいとうチームならむつとレベルあげればカイリューで耐え切れると思うけどなあ」

「これ以上に、ですか……？」

「うん。ワタル君のカイリューにはまだ先があると思うよ。で、その子を軸にしてパーティをもつ一度考え直してみるといい」

「本当に赦赦ないですね……ここまで育てるのにどれだけ苦労したと」

「うん、まあでも色々工夫すれば案外いけるものだよ。頑張りな」

「はい……」

主にしあわせたまごとか、交換とか。

私のスター・ミー達もすべて人から貰つたものだし。ジョウタローの奴、元気にしてるかな？ ヒートマンの研究論文で博士号を貰つたって聞いたけど……。

「ところで先輩」

「うん？」

「その子が先輩の言つていた例のお子さんですか？」

「ああ、いや。この子は息子の友達さ。ただ今日から私の弟子になる子だから先に高レベルのバトルを見せておこうかと」

「先輩が弟子を取るんですか！？」

「何もそこまで驚かんでも……」

あ、いや、しかし、なんて言葉を濁すワタル君。
柄じやないってのは自覚してるから、そんなに動搖しないでくれ。
軽く凹むじやないか。

「君、名前はなんていうんだい？」

「し、シゲルです」

「そうか、シゲル君だね。君は手ごわい相手になりそうだ」

「えつ、あう、いえ、その……」

言われた方のシゲル君は目を白黒させて慌てている。

「ワタル君。リップサービスもほどほどにしてくれ
「割と本気なんですが……」

そのとき、ポケモンの治療が終わつたことをつげるアナウンスが流れた。ワタルが呼び出されている。

「あつと、すいません先輩。ちょっとのあと用事があるのでポケモンたちを受け取つたらそのまま失礼します」

「ああ、わかつた。いや、忙しいのにつき合わせて悪かつたね。急な頼みだつたのに訊いてくれてありがと」

「いえ、俺も勉強になりましたし、一回とはいえあの悪魔も倒せましたからね。本当は最近チャンピオンとして調子が良かつたんで今田こそ勝てるかも、と思つてたんですけど、それも慢心だつたと気付けて良かつたです。ですが、次は俺が勝ちますよ」

「ああ、楽しみにしてる」

私の返事にニヤリと笑つて立ち去つて、ワタル君。

相変わらず派手で変な身なりだけど、不思議と似合つ立つ振る舞いだ。などと私は感心していた。

「……オジさん」

「うん?」

「オジさんって何者なの?」

「うーん……。サトシの父親、でいいんじゃないかな?」

「うーん」と、サトシは知つてゐるの?

「多分知らないね。教えた」とないし

「なんで?」

「教える必要がないし、むしろ生きっこべ上じや邪魔になると思つから、かな。出来れば」の」とは秘密にしておいてくれないか？」

「……よくわからぬけどサトシに秘密にしなきゃいけないのはわかつた。でも、なんで俺には教えたの？」

「君は私の弟子になるんだ。自分がどんな人間に師事するのかを教えておく。が何かとやりやすいだろ？」

「ううと意地悪くウインクしてみせる。

「オジヤー、本当にあのサトシのお父さんなの？」

「……違つよつて見えるのかい？」

「わかんねえ。でも何でも直球なサトシとは似てない、『氣』がある

「そつか

「なんか変な」と言つて、めんねこ。とにかくこれからよひしく

おねがいします師匠」

「うん。よろしく。じゃあさくべ家に帰つて授業を始めようか

「はー。」

元氣があつて大変よろしく。

教える側も教わる側も初めての授業だったせいか詰め込みすぎたようだ。

次の日、シゲル君は知恵熱を出して寝込んでしまった。各所に謝りに行ついたら会社に遅刻した。

息子には変な目で見られたし、どうにも調子に乗りすぎたようだ。

とりあえず授業は週一でやつくつかつてこくじにしてやつ。

息子とライバル 4（後書き）

お疲れ様です。

あいかわらず超展開です。書き直しても超展開でした。バトルが酷いのは仕様です。つつこみもバンバンどうぞ。そもそも知識が足りなさ過ぎて泣いた。

息子とライバルはもう少し続きます。

「マサラタウン オーキド研究所 第一資料室

埃の充満していた部屋を軽く掃除してパイプ椅子と折りたたみ式の長机を組み立てた。

少し車輪のがたついたホワイトボードを引っ張り出してくる。机の上を雑巾で軽く拭い、そこにテキスト類を置く。

そうしてやっと私とシゲル君は向かい合って席についた。

シゲル君の授業は彼自身の要望で今日からここで行うことになった。

努力しているところをサトシに見られたくないからだとか。

孫の頼みに快く部屋を貸してくれた教授だが、ていよく使っていない部屋を掃除させたかったようにも思える。少し穿ちすぎだらうか。

この部屋は長い間使っていないのか少し黒臭いような、インクの染み付いたような臭いがするんだが……。

「さて、一回目の授業を始めるわけだけど……シゲル君はプロローグの中継はよく見るかい？」

「はい、師匠」

「じゃあプロリーグのバトルで良く使われているわざやポケモンについてはある程度知っていると見ていいかな？」

「たぶん、大丈夫です」

「よし、それじゃあ早速だけど、ワタル君が私に勝てなかつた根本的な理由はなんだつたと思う?」

「えつと……なんだか色々あつたけど、俺にはよくわからなかつたです。スター・ミーが色んなタイプの技を使つていたこと、ヌケニン

が不思議な力を持つていたくらいしか……」

「うん、まあその年でそこまで理解できるなら十分かな。これが家のサトシだつたらスター・ミーが凄く強かつたとかヌケーンが反則だつた、で終わっちゃうかもしれないし」

「でも俺が一番わからないのは、なんで師匠は途中で勝てるってわ

かつたのかなんです。まだポケモンを出してもいなかつたのに」

「おお、いいところに目をつけたね。それこそが私がこれから君に教える戦い方の特徴なんだ」

「どういうことですか？」

「シゲル君。君はある試合でワタル君が私に勝つ方法を思いつくかい？」

「……無理だと思います。師匠のスター・ミーはキングドラ以外のポケモンを一撃で倒していました。避けたり、先手をとろうとしてもそれ以上に素早かつたし……たとえ一匹はキングドラで倒せたとしても一匹目が居るんじゃどうしようもないです」

少し考えて答えてくれたシゲル君。ま、予想通りの答えだ。

「残念だけど、それは違うかな

「え、でもどう考えても……」

「確かに今のポケモンリーグは力と力のぶつかり合いのような部分が大きいから、プロでもそう考えてしまう人は多いだろうね。だからシゲル君。君の答えは決しておかしいものじゃない」

「師匠は違うんですか？」

「違うね。そもそも私のスター・ミーが一匹ともまったく同じだと思つている時点で考え方を間違えているよ」

「えつ？」

「なんで私がスター・ミーを一匹持つていたと思つ?」

ホワイトボードに簡単なスター・ミーの絵を縦に並べて一つ描く。

それぞれの隣に A・B と書き入れるのも忘れない。

「一匹田が倒されたときの予備、じゃないんですか？」

「そういう面もあるけれどそれだけじゃないね。二匹しか使えないのにまったく同じスター＝ミーを一匹入れたつてあまり意味はないし」

「意味がない？」

「わかりやすく言おうか？ もしワタルがキングドラを一匹以上持つていたら？」

「あ！」

「理解できた？ たとえスケーンで倒せても続けてキングドラをしてくるわけがない。そしてすでに最初のスター＝ミーが倒されているのに、そのスター＝ミーとまったく同じ能力とわざを覚えているスター＝ミーが勝てるなんて考えるのは楽観的すぎるだろ？？」

「確かにそうですね。じゃあそれならなんで師匠のメンバーにはスター＝ミーが一匹居たんですか？」

「一匹田のスター＝ミーは一匹田と同じじゃないのか？」

「同じ、じゃない？」

「タイプの相性については、博士のお孫さんだから当然知ってるね？」

「はい」

「一匹田のスター＝ミー、仮に A とするか、こいつはすばやくは高くないけれど、とくにそれはそれほど高くない。一匹田のスター＝ミー、こつちは B とするか、B は逆にとくにほとんでも高くけれど、すばやさはそれほど高くなかつた」

「一つのスター＝ミーの絵の横にそれぞれとくにひとつ、すばやく高く、すばやく低い記入する。

「えつと……？」

質問があるかな？と見てみるとシゲル君は首をかしげている。まだ説明を続けないといけないか。

「Aは確実に先手が取れる。けれどあまり攻撃力は高くない。だからみず、こおり、でんきと3タイプの攻撃技を覚えさせて相手の弱点を適確につけるようにしたんだ。BはAが倒しきれない敵も倒せる、かもしれない。けれど、先手を取られやすいし安定感に欠ける」

Aの絵の横に覚えているわざを書き加える。

「……でもそれだとAが先手を取つたけどそのまま倒されて、Bは先手を取られて負けることがありますか？」

「何も考えずに出せばそうなってしまつね。だからAにはでんじはを覚えさせていたんだ。まひ状態にすればすばやさは最低になるからね。後から出すBでも先手が取れるようになるし、たまに敵の身体が痺れて動けないこともある。それならBが一撃で倒せなかつたとしても倒しきるまで攻撃できる、かもしれない」

Aのわざにでんじはを書き足す。

AとBの絵の説明文を書いた側とは反対側に敵と描いて○で囲む。空いているスペースに『すばやさA > 敵 > B』と書く。

解説しながらでんじは先に書いた敵マークにAから矢印を書いて上にその上にでんじはと書く。

敵マークの上にでんじは使用後、A < B < 敵と書く。

次に敵側から攻撃と書いた矢印をつくり、Aの絵にバツテンをかいた。

「でも、それでもまだ運任せですよね？逆転されてしまう可能性も大きいんじゃない？」

「そうだね。だからヌケニンにはかげぶんしんとバトンタッチを覚

えさせていたし、Bのスター／ミーにはみがわりを覚えさせていたんだ。まあ、ワタル君とバトルするときはルール上の問題でスケニンのバトンタッチは意味が無いんだけどね」「ね

Bのわざ欄にみがわりを記入する。スケニンは、まあ描かなくてもいいだろ？。

「こちらが何も言わずとも自分のノートにホワイトボードの絵を書き写しているシゲル君。勉強熱心で大変よろしい。こっちもやる気が出るというものだ。まるで受験中の学生のようだけれど。

ただ、ノートが自由帳なのは小学生らしさといふか、『恋嬌』といふか。

「そのバトンタッチとみがわりってどんなわざなんですか？」

無駄なことを考えながら見ていたら、ノートから顔を上げて質問してきた。

「ああ、それは知らないのか。バトンタッチはポケモンの使った一部のわざの効果を次に出てくるポケモンに引き継ぐってわざなんだけど、詳しくはまた今度教えてあげよう。この場合はかげぶんしんを次のスター／ミーに引き継いでみがわりさせて安全性を高めるのが目的だ。

みがわりは自分の体力を削って相手の攻撃を代わりに受け止めてくれる分身を作り出すわざだね。こいつを使えば一撃で倒れるようなわざも防げる。ただ使うだけじゃジリ貧になりやすいわざだけど、でんじはやかげぶんしんと組み合わせれば強力な効果を発揮してくれるんだ。みがわり、かげぶんしん、でんじは。これらの技は覚えられるポケモンも多い上に、考えてつかえばとても強力な効果を得られるわざだから覚えておいて損はない。まあ、わざについてはそのうち詳しくやるからまだいいけどね」

ボードの空いたスペースにでんじは +みがわり= 効果倍増と書いておく。

「……すごいです師匠。俺、プロの試合見てもそんなに考えてやつてるなんて思ったことも無かったです……」

「まあ、これくらいで感心されても教える側としては困るかな。もつと万全を期すなら一匹目のスター・ミーを他のポケモンにしたほうがずっと効率はいいからね。そのうえでヌケニンもテッカニンに変えればずっと安定したパーティになる。ヌケニンはすばやさが高くないから完封できない相手に出すと速攻でやられることが多いし」

正直、ヌケニンは元々別の目的に使っていたのを遊び心で入れてみただけし。ガチで勝ちに行くようなメンバーじゃなかつた。ワタル君の性格から十中八九覚えさせていないと確信していたけど、キングドラだってどぐどくを覚えられるのだ。ヌケニンのとくせいは状態異常ややどりきのたねなどの効果ダメージまでは防げない。

もつとも、元の世界ではその脅威性を知られきつているから対策も取られているが、この世界じゃヌケニン対策なんてどれだけの人がしていることか。チャンピオンですら知らないのだ。事実、昔使っていたときは本当に猛威を振るつてくれたものである。

「効率?」

「同じポケモンに異なる役割をさせるよりも違うポケモンに異なる役割をさせたほうが何かと都合がいい場合が多いって話なんだけど、これは今回は置いておく。だからノートに書かなくてもいいよ」

そもそも、スター・ミーが手持ちに一匹も入っていたのは、ちょうど個体値と性格に恵まれたのが一匹も手に入つて浮かれていたときにワタル君と初バトルすることになつて、そのまま変えていないだ

けだし。スケニンが入っているのだってちょっとした遊び心からだ。このパーティは出す順番が半ば決まってしまっているうえに弱点も多いからワタル君相手以外じゃ危なっかしくて使えない。

「まだ上が……。聞けば聞くほどワタルさんが師匠に勝てるとは思えなくなってしまいます」

「そんなことはないよ。このあいだの試合ならワタル君が勝つ可能性もあるにはあったわ」

そんな驚いた顔しながら、彼だってチャンピオンなんだし、出してきたポケモンのレベルもそんじょそこいらトレーナーじゃ足元にも及ばないくらい高かったというのに。

バトルする前はあんなに私の実力について懐疑的だったのが凄い変わりつぱりだ。悪い気はしないけど。

「例えばポケモンを出す順番を変えるだけで随分と違う結果になつただろうね」

「でも、ポケモンの順番を変えたところでワタルさんが師匠に勝てたようには思えないです」

「じゃあ、ちょっとと解説してみようか。まずスター＝ミーをキングドラで早めに潰す。そして次に出てくるスケニンを相性で有利なリザードンかピテラで抑える」

ハマサキ、ワタルと名前を書き。その下にそれぞれの手持ちの名前を書く。それぞれの名前を矢印で結んでいく。順番を記入するのも忘れない。

「さつを書つたとおり、四田のスター＝ミーは最初に出したスター＝ミーより素早さが低いんだ」

「……えつと？」

「最後のカイリューは種族値とレベル差で素早さを上回っていたから先手を取れた。そして高いとくこうを活かしたれいとうビームでカイリューは倒せた。けれどワタルのポケモンの中でプロトランよりも行動できるかとなると少し怪しかったんだ。プロトランは種族としないならスター・ミー以上にすばやく動けるポケモンだからね。どちらのスター・ミーもすばやさが増す育て方をしたけれど、それでも元々の差つていうのは大きいからね」

すばやさ、プロトラン・スター・ミーBと空いたところに小さく書く。うーん、てきとーに描いていたからそろそろスペースが足りなくなつてきたな。

「だから最後のスター・ミーにはプロトランを当てて、こわいかおやじょうおんぱを使えば勝てたかもしれない。ちょうどおんぱは命中率に不安があるけど、混乱させればあとは何とかなるかもしない。アイテムの使用は禁止だからすぐさま回復されることもないしね。こわいかおだつたならもつと確実だ。すばやさをがくつと下げてしまえば他のポケモンたちでも先手が取れる。そうなれば私のスター・ミーは耐久力がわりと低めだからギヤラドスのはかいこうせんかカイリューの10万ボルトあたりで倒されていたんじゃないかな?」

「はあ……」

「プロトランのレベルがもつとずつと高ければかなりのキバと言つ手もあつたかもね」

「そう都合よく行くのですか? 師匠のポケモンが出る順番がわ

「プロトランのレベルがもつとずつと高ければかなりのキバと言つ手もあつたかもね」

「そう都合よく行くのですか? 師匠のポケモンが出る順番がわ

かつてでも居ない限り……あつ

ちゃんと付いてこれていたか。凄いね。

「気付いた？ 安定性の理由でこの二回はほぼ出す順番が決まつてしまつているんだ。ワタル君はスケーンの存在を知らなかつたとはいえ、最初に速攻型スター・ミーが出てくるのは何度も戦つてわかつていた。だからキングドラを用意してた。だつたら最初にキングドラを出していればあとは有利に戦えたかもしれない。そうありえない話ではないだろ？」

「じゃあ、なんでワタルさんはキングドラを最初に出さなかつたんでしょう？」

「まあ、結果からみれば判断ミスしたつてことだろ？ きっとリザードンやバンギラスで止めておいて残りの一回にキングドラを温存しておきたかったんじゃないかな？ でもバトルは水物だからそういうこともあるさ。実際、私もキングドラの特性を読み違えてしまつたし」

「……なんていうか、見てたときは凄すぎてよくわからなかつたけれど、こうして話で聞くとテレビで見てる試合とは随分違いますね」

「まあね」

あれはどちらかといえばプロレスに近いしなあ。十分に己を鍛え上げた選手たちが真っ向から見てて面白いを闘いをする。本人達は決して弱くないし、むしろ強いからこそできる戦い方だけショービジネス的な部分があるあたりとか近いと思う。

勝利や効率と言う面で考えると最高のものとは限らない場面が多々見られるし。ただ、不思議なのは本人達もそれが勝利への最短距離だと思っている場合も多いことだ。

いや、じつちの世界で実際に暮らしてみると、私みたいなバトルをゲームのように捉えた考え方のほうがおかしいというのも肌で感

じるところではある。

私の教える戦い方は元がゲームだつただけあつて詰め将棋に近いところがあつて、ルールや定法を知らなければ横で見ていてもあまり面白いものじゃなかつたりするけれど、勝つのが目的だからとても効率的だ。ただ、こつちは現実だからそのままでは使えないことがあつたりして、そういうた部分を見つけるたびにすり合わせをしていかなければいけないのが難しいところだ。

「さて。じゃあ私とワタル君のバトルを参考にして、私のバトルで一番重要だつたところがどこか答えられるかな?」

「えつと……多すぎて、どれなのか……」

「そんなに難しく考えなくていいよ。全部ひとまとめにしてみればいい。どれも結局は同じところにあるから」

「……知識、ですか?」

「正解。途中で判断力や読みなんかもあつたけれど、何をするにしてもまず一番必要なのは知識だ。私の戦い方はそれが無いとそもそも成り立たないからね。ヌケーンの特性なんて、それこそポケモンによほど詳しくない限り知らないことだらう。でも知つていれば簡単に対策できる」

少し迷つたようだが、さくつと正解に辿り着くあたり理解力のある子じやなかろうか。こちらも随分とやりやすい。うちの息子はわからぬの連発だからな。

……といえばシゲル君はわかりませんをほとんど使わないな。全部、よく自分で考えて、その上で何かしら答えていく。多少なりともこちらで誘導したところはあるとはいえ……本当に小学生だらうか。実はふしぎなくすりを飲まされて見た目は子ども、頭脳は大人な名探偵だつたりしないよな?

「知識を基に有利な状況を構築する。それが私が君に教えるポケモ

ンバトルだよ」

「……知識で、戦う」

「研究者も田指す君にはついつつけかもしねないね」

シゲル君は本当に頭がいいように思える。オー・キド博士の影響か、説明を理解できるだけの下地もあるようだ。家の息子とはまた違う才能の塊かも。

「ただ覚悟は決めておきなさい。知識で戦うと言つても、それには膨大な時間と努力が必要になる。さらにどれだけ知識を蓄えようと終わりはない。情報つていうのは常に増え続けるものだからね。そのうえ、詳しくは教えられないけど、この考え方は何千人、何万人という人間がそれぞれ膨大な時間をかけて作ったものなんだ。それを君が自分のものとして使うのなら、そこからさらに自力で発展させなきゃならない。」

よくわからないって顔だな。まあ、最初はそれでいいんだ。いつか、教えたことだけに頼るんじゃなく自分でさらに努力していくことが大切なんだと気付くための言葉だし。

「とにかく、強くなりたければ強くあり続けるように努力しなさいってことだ。出来るね？」

「はい！」

「いい返事だ。じゃあまずは主にカントー地方に生息する伝説も含めたポケモン151匹を覚えるといふから始めようか」

シゲル君がノートに書き写し終わったのを見計らって、ボードに描いたものをすべて消す。

とりあえず図鑑順で教えていくとしよう。

島子ヒライバル 5（後書き）

今回は授業と言つ名の前回の解説になつてしましました。
まあ、次につなげますので……。本当は最後まで書くつもりでした
が、例のごとく時間の都合でここまで切りました。
手持ちのレベルとか詳しいこと決め忘れて、あとからダメージチエ
ッカーなど使いましたが……。これはひどい。な有様です。あはは。
ここまで読んでくださりありがとうございます！
頂いた感想への返信はまた後日。すみません……。

マサラタウン スクール 教室

放課後。一日の授業を終えて子ども達が元気良く教室を飛び出していく。

そんななかでシゲルは一人机にしがみ付いて学校のものとは違うテキストとにらめっこしていた。

「……ピカチュウ、カイリュー、ヤドラン、ピジョン……」

眉を寄せてぶつぶつとポケモンの名前を呟いてくる。

「あー、やばい！ 覚えきれねえ……なんだよ151匹も一週間で覚られるわけねーじゃん。名前だけならまだしも特長とか特性とか体長とかそいつしか覚えないわざとか、そんなのまで覚えるとか、マジありえねー！」

シゲルがうがあつと両手で頭を抱え出した。粗鈍フクラストレーショング溜まっているようだ。

一週間、小学生が寝る間も惜しんでポケモンの名前とその詳細を一致させて覚える作業を繰り返していればこうなつても仕方ないのかもしれないが。

「そもそも、サンダーとかフリーザーとか実在してるかどうかわからんないようなポケモンまで覚える必要あんの？ ミュウとかミュウツーなんて聞いたこともねーぞ……」

そもそもポケモンが151種類もカントーに生息していたことから

して彼には驚きだった。

カントーで正式に確認されていたポケモンの種類はその半分くらいだったはずなのに。

この疑問についてシゲルは、ハマサキから宿題を貰ったその日のうちに祖父に確認を取っていた。

すると祖父は「わしはおよそそのくらいの種類がカントーには生息しているものと見込んでいるんじやが……誰から聞いたんじや？ ハマサキ君？ ああ、まあ彼ならそれほど不思議でもないかものう」と言い、ますます疑念が深まっただけだった。

仮にカントーに151種類近くのポケモンがいるとしてそのことを当然のように語るハマサキは何者なのだろう？ まだ幼いとはいえ、シゲルにだって明らかに変であることくらいわかる。

ただ、ハマサキが凄腕トレーナーであり、それらを自分に伝授してくれるといま、余計なことを言つて辞められるのも困るから突っ込まないだけなのだ。

「だからって、学校の宿題もあるのにこんな覚えきれないって……けどやんねーと、ドククラゲの刑だと言つてたし……「ああ」

ふと窓越しに外を見る。そこ広くない校庭ではサトシのギャラードスが子どもたちの遊び場になっていた。きやいきやいと騒ぐクラスメート達に囲まれて、サトシもまんざらではない様子だ。

遠目からでもわかつた。

親友が楽しそうなのはいい。でも自分がそこに混ざつていない……。いや今、自分が望んでいることは、他のクラスメートと一緒にになって彼の周りにいることじやない。

胸を張つて対等の立場であると誇れることだ。

「ぐぬぬ……やっぱりまだやつてんだし、サトシだけは負けたくないな

一人、ぼっちの教室がやけに寂しく感じられてシゲルは帰り支度を始めた。

マサラタウン　スクール　校庭

たくさんのクラスメートに囲まれたサトシは、複雑な心境だった。ギャラドスに進化させる前は余所余所しかつたクラスメート達が今は我先に質問をしてくる。

「なあ、どうやって進化させたんだ？」

「こいつ、言うこと聞くの？」

「近づいても大丈夫なの？ ギャラドスって凄く凶暴なんでしょう？」

「テレビで見たギャラドスは青かつたけどお前のは赤いんだな、なんでだ？」

「かっけー、マジかっけー！ いいな、いいなー！」

最初は彼らもおつかなびっくりだった。けれどギャラドスがサトシの言うことをよく聞いて守っているのを見て好奇心が抑えきれなくなつたらしく。

今ではギャラドスの巨大な身体をぺたぺたとその小さな手で触つたり、ゆらゆら揺れる尾っぽに捕まつたりと好き好きに遊んでいる。その中にはコイキングがギャラドスに進化したときのふとっちょとやせぎすも居た。

自分の育てたギャラドスが人に褒められるのは嬉しかった。なんだから自分も認められているうような気がした。

自慢のギャラドスだ。毎日毎日、はねさせてきたせいか外に出していると時々はねてしまふ癖がついているけれどそこも愛嬌に思える。コイキングのときから愛情を注いで育てたのだ。最初は弱すぎて泣きたくなつた。何が起きてもほとんど変わることのないまぬけ面にも苛立つた。

でも、長く世話をしているうちに愛着が沸いてきた。特訓中にわるあがきで傷ついた身体を傷薬で直してあげると尾ひれを激しく振つて喜ぶし、好きな餌をあげれば表情も少し喜びに変わる。

毎日、わるあがきを命じて怪我させているのがなんだか辛くなつてきたとき、たいあたりを覚えた。コイキングが自分の気持ちを感じて頑張つてくれたような気がしてちらりと愛着が沸いた。

でも、そんなコイキングと自分のことを認めてくれている人間はほとんど居なかつた。子どもだけじゃない。マサラの大人の中にだつて自分と自分の父親を馬鹿にするような人がいたことも知つていて、「息子に最初のポケモンとしてコイキングを与えるなんてどうかしいいる」だとか「ギャラドスに進化するなんて信じられない、新手の虐待じゃないの? いくら父親の言うことだからって馬鹿正直に従つともないのにね」だとか。

偶然通りがかつて耳にしたおばちゃん同士の噂話だったけれど、自分の努力と大好きな父親を否定されたようで悔しくて。

ハマサキが帰つてくる前に誰も居ない家で泣いたこともあった。いや、引っ越してきてからしばらくはほぼ毎日そうしていた。

だからこそ、そこから自分を連れ出してくれた親友が今、ここに居ないことが寂しかつた。

「あいつ、どうしたのかな……」小さなつぶやきが口から出でていった。

最近、シゲルはサトシとあまり遊ばなくなつた。サトシは自分の周りに人が増えて遊びに誘いづらくなつたのだろうか?と思い、自分から誘つてみたがちょっととやることがあるから、と素氣無く断られてしまつていた。

自分は何か親友を怒らせるようなことをしただろうか。身に覚えはない。でも、きっと何かあるんだろう。……ダメだ、わからない。

いつもなら直接話をして訊いてみよう!

と懶みに結論づけたサトシはちよつと校門を出て行こうとするシゲルの後姿を見つけた。

クラスメート達に「ちよつとい」めんね」と声をかけて走り出す。

その後ろをギャラドスがはねるよう追いかけた。クラスメートたちの悲鳴が聞こえて一瞬振り返つたが、誰も怪我などはしていないみつだ。

「うー、ごめんよーー」

とひとつ謝つてそのままシゲルに追いついた。

「シゲル!」

「ケーシィ、ベトベ……、ん? ああ、サトシか。どうした」

後ろから声をかけられて振り向いたシゲル。サトシの後ろから自

分に向かってはねてくるギャラリースに驚かないのはさすがである。

「どうしたじやないよ。最近忙しそうだけど、なんかあつたの？
たまには一緒に遊ぼうよ」

相手の様子を窺うような聲音だが、本音も漏れている。そのことに気付きつつもシゲルはいつもどおりの答えを返した。

「あー、悪い。今は遊んでる暇ないんだわ」

「今はって……何してるのね？？」

「それは……」

言ひよどむシゲル。対して訝しげな表情のサトシ。

「教えてよ。なんなら手伝つかられ」

ややつて、シゲルが口を開いた。

「お前には言えない」

「……なんだよそれ」

友達だと、それ以上の親友だと思っていたのは自分だけだったのだろうか。まるで崖から突き落とされたかのように、冷水をバケツで頭からひっかけられたかのようだ。

一気に気が重くなつていくサトシ。底まで辿り着いた末に待つていたのはムカムカとした感情による上昇だつた。

「サトシ。お前のことは友達だと思つてゐる。けど……だから」やお前の手伝いは要らない

が、それを止めるような発言がシゲルから出てきた。やがて再度の拒絶もつていてる。

「わけわからんないよつー…？」

それはサトシの心を落ち着かせるどころか更なる混乱の渦に叩き込んだだけだった。

「お前、ポケモンマスターを目指してるんだろ？」

が、友人のそのさまを見てもなおシゲルは淡々と続けた。確認を取るようなそれに、サトシも頷いて返す。

「やうだけど？」

「俺も目標してる。そういうことだ」

そういう言い残して立ち去るシゲルの背中をサトシは呆然と見詰める」としかできなかつた。

たつた今、親友の言つた言葉の意味。勉強は苦手なサトシだったけれど、それはすぐさま理解できた。

きっと、彼は今、努力しているのだ。自分がコイキングを特訓させていたときのようだ。

あの時、見かねたシゲルが「何か手伝おうか?」と言つて、サトシはこう答えたのだ。

「そう言つてくれるのは嬉しいけど手伝わなくていいよ。ポケモンマスターになるのならこれから自分でやるべからずや」と。

「この日の時から一人はライバルとなつた。

ノリと勢いの産物です。いつものことですが。
自分で書いててむずがゆくなつた。

息子とピカチュウ 1

マサラタウン 自宅

日曜日の夜。

息子への予備知識詰めが一通り終わつて今は授業に使用した道具の後片付け。

息子がマサラを旅立つ日まであと一日。

今日は息子に今まで教えてきた内容の総復習を行つた。うる覚えな部分があれば容赦なく突つついた。

その結果がリビングでテーブルに突つ伏しているうちの息子の姿である。

とはいえ、シゲル君に比べれば遙かにマシだ。

彼にも先日、総復習を兼ねたテストを行つたところ、すべての回答を埋めた直後、青ざめた顔で口の端から泡を吹いていた。

まあ、親御さんや教授、果てはナナミさんからも本人が望んでいふなら思う存分扱いてよいとのお墨付きをもらつてある。

……とはいえ、あまりに根の詰めかたが酷いときは授業も中止して説教したりもしたのだが。

さすがに子どものうちから徹夜でテスト勉強なんぞ、見過させるものではなかつた。

シゲル君の家庭教師を引き受けてから、家の息子もシゲル君もやる気に満ち溢れていた。というか、どちらも私も含めた大人たちが舌を巻くほどにすさまじいのだ。

まず家の息子は何よりも楽しみにしているプロリーグの実況中継を我慢してでも勉強するようになつた。

大好きなワタル君の試合ですから我慢するのだ。

「観なくていいのか?」と訊けば「観たいけど……我慢する。負けたくないし。シゲルはきっともつと我慢してる。あいつ、凄いもん」と。

本当にライバル作戦は上手くいった。やる気をみせる息子の表情を見ると、たびにそう思つ。

他にも、常にメモとペンを持ち歩くようになった。田に付いたポケモンで気になつたこと、気付いたことがあれば何でも書きだし、私や教授に訊きに行くのだ。

だが、何よりも驚かされたのが自分のギャラドスの体長管理を徹底するようになったことだ。

毎日、何をどのくらい食べたか、鱗のつやはどうだったか、どのポケモンを相手に何度バトルしたか、等を詳細に記録しているのだ。プロのトレーナーやブリーダーなら行つてもおかしくないことだが、とても旅に出る前の駆け出しがするようなことではない。

誤解してほしくないのだが、これは私がやれと言つたのではない。息子がすべて自分で考え、自発的に始めたことである。

最初にギャラドスのことをもつと知りたいが、何をすれば良いのかわからないと相談されたので、毎日よく見てあげなさい、くらいには言つたが本当にそれだけである。

家の子は天才じゃなかろうか。などと私が思つてしまつても決して親馬鹿ではないはずだ。外聞を気にしなくて良いのならば、近所さんに我慢して回りたいくらいである。

そんな息子にライバル認定されたシゲル君のほうも「これまた凄い。

最初に、絶対に覚えきれないだらうと思つて出した宿題を、たつたの一週間ですべてマスターしてきて私の度肝を抜いたことから始まり、その後の倍ブッショウも涼しい顔で応え。

今ではカントー、ジョウト、ホウエンに生息するポケモンならば名前だけでなく特性と特長、主な出現場所までそらで述べられるほどだ。

家の息子は未だにカントーだけで手一杯だというの。

（とはいって、眼の下に隈が出来ていたけれど。無理させちゃったかなあ）

加えてポケモンのわざ、努力値、個体値なども教えている。にもかかわらず文句のひとつも言わないで次回までに必ず覚えてくる。とはいって、次の授業までに覚え切れそうになければ徹夜してまで習得しようとするらしく、何度も説教するはめになつたのだが。シゲル君の言い訳が「ボヤボヤしてたらいつまで経つてもサトシに追いつけないです。唯でさえ学ぶことは多いのに。それに覚えるのは大変だけど知らないことを勉強するのはず」「く楽しいんです」だつたときは思わず閉口した。

無理をして体を壊したら追いつくビームではなくなる、学霸ペースはちゃんと考へている。正直、わざと多めに出している部分もあるから、覚えきれなくとも授業が遅れるわけじゃない」と言つて諭したが……なんというか教授の孫だから凄い、なんてレベルを超えている。根性の塊じやなかろうか。

さすがに倍ブッショウのあとは自重したのか、徹夜する」とはなく

なつたけれども、それでも就寝時間のギリギリまで勉強しているようだ。

その成果か、ポケモンの知識に関する息子の一歩も一歩も先を進んでいるのは確かだ。

いや、その後ろに必死で食らい付いていている息子も年齢を鑑みれば十分凄いのだが。

バトルにおける具体的な戦術などはまず知識があつてなんぼなので後回しにしていたのだが、その辺はシゲル君も理解してくれている。むしろ、知識を詰め込むことで精一杯といった様子である。まあ、戦術などと言つても、こっちの世界ではポケモンに関する知識をバトルに応用したものでしかない。

現実にポケモンのいるこの世界ではポケモンに関する研究自体は盛んに行われている。

ただ、研究することが多岐に及びすぎているために、肝心のバトルに応用できる知識がこの世界ではさほど蓄積されていないだけなのだ。

だから相対的に優位になつてているだけだと私は考えている。

よつて、研究が進み知識が蓄積されていくに連れ「いばみが」などの戦術を使うトレーナーも出てくると思うのだ。今でもすべてのトレーナーが力押しというわけではないし。

だから知識さえ教えておけばシゲル君ならば私が教えずとも自分でなんとかしてしまえるだろう。

とはいっても、時々雑談交じりに教えていたし、これから旅立ちまでの一ヶ月で詰め込めるだけ詰め込んでみるつもりだ。

一人には他にも私が個人的トレーナーとしてあると便利だと思つ

知識を叩き込んだ。

ポケモンの種類、分布、世話の仕方、ポケモンと人の歴史、カントーの地理、各都市の歴史、条例、お勧めのお店、野営の仕方、水源探しに役立つポケモン、旅のトレーナーとバトルする際の注意事項やローカルルール、近づいてはいけない場所、緊急時の連絡方法、食料調達、一部ポケモンの変わった毛づくろい方法、神社、寺社仏閣を参拝する際のマナー、ポケモンに関する倫理、トレーナーとしての禁止事項、各種きのみの効能と入手できる場所……他にも色々。

あとは旅に出て自分達で経験して学ぶだけだらう。

この子達は、確実に将来大物になる。親馬鹿かもしれないが、見事に応えてくれる彼らを見ているとそう思えてならないのだ。

「んー、自己紹介かあ」

何となく息子たちの将来まで思いを馳せていた私だが、息子の悩み声に引き戻された。

いつのまにか立ち直っていた息子は両手で掲げるように持ったランプよりも一回り大きめのカードを睨みつけている。

新品ピカピカのトレーナーカードだ。

先日、息子を連れてトキワのポケモンセンターで発行してもらつてきしたものである。

息子は自分のトレーナーカードを手に入れたことが嬉しいようであいさつとプロフィール欄になんと書こうか悩んでいたようだつた。

「サトシ」

「んー？ 何さ、父ちゃん」

「お前の誕生日、つまり出発の日まであと一ヶ月なわけだが」

息子の誕生日は4月の頭。ちょうど旅立ちの日と重なっていた。

「うん」

「父ちゃんの教えたポケモントレーナーの約束事はちゃんと覚えているか？」

「覚えてるよ」

「言つてみなさい」

「うん。ひとつ、ポケモンをいじめない。ふたつ、人のポケモンをとらない。みつ、弱っている野生のポケモンを見つけたら出来るかぎり見捨てない。よつ、きずぐすりとモンスター・ボールは切らさない。いつ、むやみに危ないところへは近づかない。むつ、相手の同意無しにバトルをしかけない。ななつ、ポケモンを悪いことに使わない。やつ、ポケモンに人を攻撃させない。ここにつ、捕まえたポケモンには責任を持つ。とお、ポケモンと仲良く！ でしょ？」

五つ目の、危険なところ、といつのは自分の力量では挑戦出来ないような場所のことだ。ふたご島などは旅をして自分とポケモンのレベルを上げてからでないと危険極まりない。

何より尋常でなく寒い。ポケモンを捕まえに行くのならば防寒具なども必要になるだろう。自分の力量をかんがみた上で挑戦できるかどうかを判断し、行くのならば事前にしっかり準備をしておきなさいといつ意味も含んでいる。

そのほかの約束事は説明するまでもないだろう。悪いことに使わない、人に襲わせないが被つているようにも思えるが、正義の行いと称して人を攻撃することは問題ないと思われたら困るのでわけであるのだ。

何があつてもポケモンに人を襲うように命じてはいけない。絶対にだ。どんな悪人相手であろうと人に向けてはかいこうせんを撃たせたりしてはいけないのである。

「よし覚えているな。いいか、ただ覚えるだけじゃなく、絶対に守ることが大事なんだからな。あまり悪いことしてるとリーグビニョルがジムの挑戦権すら剥奪されるから気をつけるように」

「えー、トレーナーどころか人として当然のことじやん。大丈夫だ

よ」

「……そうだな

「えへへ」

……人として当然のこと、か。自己嫌悪の感情で少し胸が痛くなつた。

息子は真っ直ぐな良い子に育つている。それはとても喜ばしいことだと思つ。

けれど、だからこそ不安もある。

私がふがいないせいで人の惡意といつものを知らずに育ちはしなかつた。少なくとも、すべての人が善人であるとも思つてはいないうだろう。

が、それでもまだ甘いのだ。世の中には自分の理解が及ばないほどの悪党がいるのだから。

例えば、息子に何食わぬ顔で教え込んでおきながら自分は何一つ守れたものがない父親などはその最たるものだらう。

なんせ、そいつのトレーナーカードにはジム戦を含む、すべての公式戦への永久出場禁止印が押されていて、ポケモンセンターなどを利用する際には会社で用意してもらつた偽造カードを使つているような男である。

「……」

「父ちゃん?」

「ん? ああ、どうかしたか?」

「いきなり黙つてどうしたの。なんか怖い顔してたよ」

「ああ、いや、ごめんな。サトシは関係ないよ。ちょっと嫌なことを思ひ出しちゃね。おお、もうこんな時間じゃないか。サトシ、学校の宿題は終わつていいのか?」

「終わつてるー」

「へえ、めずらしく」ともあるもんだ

「ひつでー、そりやなによ!」

「おひ、スマンスマン。じゃあ風呂入つてさっさと寝なさい。明日は日直で早いんだろ? そうだな、久しづりに一緒にに入るか?」

「うーん、今日はこいや。もう少し風呂紹介を考えたいし」

少し寂しい。去年くらいまでは説けば手を挙げて喜んだものだが……。トレーナーを指す者として自立しつつあるのだろうか。そつ考えると嬉しくもあり寂しくもあり。

などと随分とびふつ飛んだ発想で自分を慰めながら風呂場へと向かつた。

結局、やの田、サトシは風呂紹介を決められないと睨つてしまつたよつた。

ロジングのソファでトレーナーカードを握り締めたままいびきを

かく息子をベッドまで運んでやり、階段を降りていると、じゅうでポケットに入れていたポケギアが着信を知らせた。

見覚えのある番号だ。かかるてくるのは本当に久々だけれど、見間違えるはずもない。

なんせ義理の妹からだ。

「はい、ハマサキです。ええ、お久しぶりです……ハナ「さん」

？？？？

高層ビルの並び立つ、とあるシティのビジネス街。中でも、ひと
きわ目立つ黒塗りの超高層ビル。

「……ふむ。つまり、いまのところ完全な再現は出来ないが汎用性
を持たせた劣化品は作れるかもしね、といふことか」

その最上層の一室で一人の男が部下から報告を受けていた。

「悪くないな。劣化品とはいえ持たせるだけで強化できるのだろう
？」

男のいる部屋の壁には偶蹄目と見られる巨大な角を生やした生物
の頭部の剥製が飾られ、床には素材の形を丸ごとそのまま活かした
猛獣のものと思しき毛皮の絨毯が敷かれている。

さらに十人は樂々と腰掛けられるのではないかといふほど巨大な
ソファー。重厚な黒革の質感は見識の無いものにも高級だと断じさせ
るだろ？。

それが向かい合わせに二つ。間には磨き抜かれた硝子のシックな
テーブル。

この部屋にあるものは大なり小なり、共通の方向性で揃えられて
いる。

一目見ただけで、豪勢。というよりも視覚から威圧感を覚えるそれらの内装が相まって、見る者にある種のステレオタイプ的なものを想像させるのだ。

部屋の主は己の持つ力を誇示する必要のある人物であると、少なくともこの部屋の主を一般人だと思わせない程度には。

そしてその想像は、実物と微塵も違ひがないのである。

「はい。効果だけといえばオリジナルには劣りますが特定の種族だけでなく、タイプごとに効果を發揮するものが作れるとの見込みです。許可を貰いただければ来月中には試作品の開発に着手できる、かと」

モーターの向こうの部下は緊張からか、少しばかり早口になつている。だが、この男を前にしたならばそれは無理もないことだらう。

「……ふむ。ポケモンを直接強化する製品はシルフでも開発の段処が立つていなかつた筈。たとえ商品化せずともグループ内でならば即軍事転用も出来る、か。よし、いいだらう。引き続きよろしく頼むぞ」

「ハツ！ 全力を尽くします！」

「うむ。これで報告は終わりか？」

その身の中に潜む深い欲望が、暗く眼光となつて漏れ出でているような鋭い三白眼。

オールバックに撫でつけた髪は額に見事なM字を描き、輪郭を含めそのほとんどを鈍角と一部の鋭角のみで構成されているかのよくな厳つきで。

これらだけでも柔らか味とは無縁の顔つきだが、ダメ押しとばかりにすべて剃り落とされた眉の存在がさらなる迫力を加えている。

年齢は40代半ばといったところか。しかし、オレンジのスーツ

越しでもがつしりと鍛えられているのがわかる肉体は、中年太りなどとは無縁であろう。

たとえ、頬はあがり、口元は弧を描いていたとしても安心など出来ない。

そう思わせる邪悪な雰囲気が顔だけでなく、全身から滲み出しているのだ。

だが、一度言葉を発せばそれすらも妖しい魅力となつて人間を惹き付ける。現にこの部下を含め、何千、何万という人間がこの男に忠誠を誓い、道を外す行いに手を染めていた。

まさしく悪のカリスマを体現したかのような男、それが サカキ。

世界的な大企業をいくつもその傘下に治める超巨大財閥、ロケット・コンツェルンのCEO（最高経営者）であり

世界征服を目的に活動し、カントーを中心とした世界各地で起こるポケモン犯罪のほとんどに関わっているポケモンマフィア、ロケット団のボスであり

ポケモンリーグ本部のあるセキエイリーグにジムリーダーとして名を置く、表の顔も裏の顔もとんでもない男である。

「あ、いえ、実はもう一件ござります」
「む？」

部下の言葉に、サカキは毛の生えていない片眉をあげて反応した。

「以前、接觸したシルフカンパニー内部協力者達から準備は整つた

との報告が。何時でも実行にひっせるとのことです」

サカキは一ヤリと口元を歪ませた。

「ほう。ならばサントアンヌ号の計画の後に実行するとしよう。我がロケット・コンシエルン最大のライバルが相手なのだ、私が行くのも面白い」

「さ、サカキ様自らですか！？」

「ふ、シルフを落とし、その技術を奪つたならば我々が世界を征服したも同然だ。ここで私が動かすぞ！」

「た、確かに仰るとおりであります」

「それにシルフにはあの伝説使いがいる」

裏の業界で噂されていたシルフの切り札。内部に裏切り者とスペイを用意するために行つたカモフラージュの妨害工作はその存在を引きずり出していた。

「それに関しましては既に対策を練つてありますか……」

「だが、相手は伝説を使うのだろう。念を入れすぎるといふこともあるまい？」

「は、はあ」

「実行日についてはおつて指示しよう」

「了解しました。報告は以上です」

「うむ、ではアポロよ、期待しているぞ」

サカキはそう言つと通信を切つた。特製の秘匿回線を用いているとはいへ、必要以上に長話をするつもりもない。情報の漏洩、時間の無駄、リスクとコストは徹底して少ないほうが良い。

特にロケット団のボスとして自ら計画を進めている今は。

「……」

バサリ、とサカキは研究結果の印字されたコピー用紙の束を机の上に放り出した。

空いた手で机の上に飾つたいくつかの写真立て中から一つを手に取る。

そこには赤毛の幼い男の子が仏頂面で映つていた。

「……ふつ」

サカキは軽い笑みを浮かべて写真を眺めていた自分に気付く。それがとても可笑しく感じられて自嘲するように息を吐いた。

数年前。子どもが出来たといって組織を抜けた男を思い出す。有能な男だった。母から継いだロケット団が2年に満たない期間で活動の舞台を一地方から世界まで広げられたのはその男が居たからだ。

もしその男が居なければ世界へと進出するにもう数年の時間を要しただろう。まさしくロケット団の過渡期を担つた男であつた。ポケモンを扱わせれば右に出るものは居らず、ジムリーダーの資格を持つサカキですら敵わないほど。

珍しいポケモンを捕まえて来いという曖昧な指示のみで、見たこともないポケモンを十も二十も捕まえてくる。ライバル企業の研究成果を盗んで来いと命令すれば得意の変装で潜入し、ついでに破壊工作までしかけてくる余裕。

幹部候補の養成所出ではなかつたが、立て続けにノルマの倍を稼ぎだし手柄を立て続けるその男をサカキは直属の部下として引き立て、幹部待遇で重用していた。

プライベートでも多少の付き合いを持っていたことを考えると幹部達よりも大事にしていたかもしない。

その男には何か目的があるようだつた。ロケット団に入ったのもそのためらしく、達成するためならばどんなことでもするという気概を持つていた。

ポケモンも人も、すべてはそのための道具としか見ていなかつたようと思える。無駄なことはしなかつたが、それが必要ならば平気で人もポケモンも傷つけ、奪い、利用する。

ボスであるサカキのことすら利用しようと思つてゐる節があつた。そこが逆に気に入つた。

世界征服という野望のために、世間では非人道的と呼ばれるようなことにも手を出す自分と似てゐると思つたのだ。そしてそんな危険な男を従えられないようでは世界を手中に収めることなど夢のまた夢、とも考えたのである。

それが突然、組織を抜け行方をくらませた。

結局、その男が何を為そうとしていたのかもわからないままだ。

「私も奴も、人の子ということか」

当時は子どもが出来た程度で野望を捨てるなど考えられなかつた。だから男の行動が理解できなかつた。

いや、同じような理由で足を洗う団員が居ないわけではない。だが、その男だけは、自分と似たところのあるその男だけは何があつても……何を犠牲にしてでも自分の目的を優先すると思つていたのだ。

しかし、今こうして自分も人の親になつてみると、男が組織を抜けるに至つた気持ちが少しだけわかるような気がした。

「……私は諦めんがな」

だが、サカキは止まらない。止まる気も無いし、すでに自分の意
思で止まれるような状況でもない。

巨大で分厚い防弾硝子越しに眼下の町並みを見下ろす。
その顔に浮かぶのは暗く、深い、凶悪な笑み。

「私はお前とは違つぞ、カッパー。何があつと手に入れる。それ
も、もうすぐだ。たとえ立ちふさがるものが伝説であつと、すべ
て飲み込んでやつ」

マカラタウン 白川 リビング

我が家は朝は他の家に比べるとかなりゆったりしている方だらう。私は5時半前には起きて朝食とお弁当の準備をする。ほとんどが前日の残り物やドレッシングを終わらせておいたものなので時間もかからない。

昔はこんな早い時間に起きたことなど無かつたし田玉焼き一つ焼くのにも手間取つたけれど……今ではたまご焼きの整形も慣れたものだ。

6時には息子も起きだすのだがそれまでにコーヒーを入れて、玄関前の郵便受けから取つてきた新聞を読む余裕まである。

我が家は一社の新聞を取つてゐる。全国紙のポケモン新聞と地域密着型のカントー日報だ。

お、うちの会社の記事も載つてゐる。ああ、ヤマブキ、コガネ間のリーア駅建設設計画に出資したこととデボンコープレーションとの技術提携についてか。

シリフスコープの技術と特殊な鉱石をモンスターボールの素材に加工する技術の交換ねえ。デボンスコープでも作るのかな……。

「父ちゃん、おはよー」

記事を読み進めているとパジャマ姿の息子が田元を擦りながら一階から降りてきた。

「はー、おはよっさん。先に顔を洗つておいで」

「はーい」とまだ半分寝ぼけた声で洗面所へと歩いていく息子。すぐには「はーい」と答えてくれる。しかし、水の音が聞こえてきた。

その間に炊き上がったご飯をよそつておく。炊飯器の中から炊き立てのかぐわしい香りが食欲をそそる。

タイマーは実に便利だ。こいつのおかげで朝を穏やかな気持ちで迎えられる。素晴らしい。

きゅつ、と蛇口を捻る音とともに水の音も止み、バタバタと息子が戻ってくる。そのままいつも座っている椅子に座りテレビを着けた。

それでは次のニュースです。

平日の朝の子供向け番組が始まるにはまだ少し時間が早く、どのチャンネルでもほとんどニュースを流している。

それを息子もわかつていてるだろうに諦めきれないのか一通りチャンネルを回す。

トキワの森に生息するピカチュウの固体数が去年に比べて激減していることがポケモン省の調べでわかりました。トキワの森はカントー地方において唯一野生のピカチュウが出現する森であることで有名でしたが

「うー……」

諦めたのか、いつも見ているニュース番組に落ち着いた。

「やけに粘ったな。何か見たいものでもあったのか?」

「昨日、学校の友達にね、毎朝7時からやつてる『おはポケ』って
いう番組に今日、ワタルが出来るつて教えてもらつたんだ。いつもは
その時間特訓や勉強してるから僕知らなかつたし……ちょっと早く
やつてたりしないかなーって」

「あー……」

息子はついいこの間まで、朝は早く起きてコイキングの特訓に出かけるのが習慣だつた。コイキングがギャラドスになつてからは出かけなくなつたが、代わりにギャラドスのコンディションチェックやポケモンの勉強をしている。

夜も基本的に特訓していたので、他の家の子に比べるとやうじつた話題に疎いに違ひない。

……いまさらだけど、最近友達が増えたと言つていたしこの年代の子が友達の話に乗れないのは酷だつたかもしれないな。いくら本人が望んだこととはいえ。

「じゃあ、今日は朝の勉強は
「つー いい、いい、いいよ！ そこまでして見たいわけじゃない
から
「そ、そつか？」

さつきは明らかに残念そうな顔してたゞひ。

「そつなのー！」

まあ、自分で決めたのなら無理にすすめるつもりもない。

「なり、『じ飯を食べたらいつもどおり学校へ行く準備をしておきなさい。今日はちょっと実践的なことをするから出かけるぞー』

「うん、わかつた」
「ほら、お味噌汁だ。熱いから気をつけろよ」

返事をする息子に味噌汁の入ったお椀を渡す。

「それじゃいただきます」
「いただきます！」

これについて携帯獣学の権威、オーキド・コキナリ教授はこの数年の間は急激にポケモンの生態系が変化するような出来事は起つてない。おそらく人為的なものであるだらうとの見解を

「あ、そういうえば父ちゃん」

「」飯を口に含んだままだつたせいで、息子の口元からぽろりと零れた米の塊がテーブルに着地、そして飛散。ああ、もは。

「こりゃ、食べながら喋るんじゃない。零してるし、口元にも」飯粒ついでいるぞ

「う、ごめんなさい」

「で、なんだ？」

「今日、トレマガの発売日でしょ？」

「そういうやあそудつたな」

トレマガとはポケモントレーナー向けの情報誌、トレーナーズマガジンの略称だ。全国のフレンドリーショップならどこでも売っているほどメジャーな雑誌だ。ポケモントレーナーならば必読とまで言われるほどである。

ただ、マサラにはフレンドリーショップがないので購入するなりトキワシティまで行く必要がある。

「トキワシティまで買い物に行きたいんだけど、今日、ちよつと約束があつて遅くなりそうなんだ。少しだけ門限を過ぎてもいい?」

「約束? 誰と何の?」

「うん、ちょっとね」

息子はあまり言いたくないのか口もつた。ビリとなく恥ずかしさつに。

「明日じゃダメなのか?」

「多分。トレーマガは明日には売れ切れてると囁つ」

約束のまゝにしてはよくわからないが、これも今日じゃなきゃダメらしいな。

気になるが……反応を見るかぎりじや、悪いことってわけでもなれやうだ。

「一ん、無理に聞か出す必要もない、か?」

しかし、門限を過ぎるのはなあ……。

もうじき一人旅を始めるとはこゝ、まだ息子は9才だ。あまり遅い時間に外を出歩かせたくない。旅立つてからも夜間の出歩きはしないように言ひ念めている。

それに最近、トキワのあたりでは不審者が出まわってい。

……よし。

「なら、父ちやんが帰つに買つておいやつ」

「え、いいの?」

「ああ。ソリのところのポケモンだけじゃなくて学校の勉強も頑張つてたしな」

「あつがと、父ちゃん」

「ねつよ。ねつと、早く食べちゃわないと時間がなくなるぞ」

「わわわ」

慌てて箸と口を動かしだす。

この子も隠し事をする年になつたのかと思つと感慨深い。

「？ 何、父ちゃん？」

「いや、なんでもなこと。おかわりは？」

「いりー。」

それでは次のニュースです。クチバシティの防波堤に欠損が見つかったことにより、延期されていた世界一周中の豪華客船サン・アンヌ号の

ヤマブキシティ シルフカンパニー本社 4階 総務部

「開発部から新しい実験に使うマシンの発注要望が来ています

「第7実験場の雨漏り修理について相見積もりは取ったかい?」

「この文章じゃダメだな。上から命令していくよつに感じるよ。すす
んで協力したくなるような感じを田舎そつ。うん、社員じゃなくて
お客様に向けて書くつもりで書き直してみ」

「ああ、子ども見学デーの参加希望者ならリストにまとめてあるか
ひ」

「あつと、その件なりもつ手配しましたよ

……

「……おや、もひですか」

仕事がひと段落ついたと思つたら、いつの間にかランチタイムになつていた。忙しいと時間が過ぎるのが早く感じるよ、まつたく。

「あら、ハマサキさんは今日もお弁当ですか？」

鞄から弁当を取り出していると同僚の女性社員に声をかけられた。ちよつと手に持つた弁当の包みを掲げてみせる。

「いのとおりや。外食するより安上がりだしね」

誰かと約束していたり、どうしても用意が出来なかつたときは食べに出ることもあるけれど基本的に私は弁当派だ。

昔は違つたけれど、息子と暮らすようになつてから料理の特訓も兼ねて作るようになつた。

長く続けたおかげか、今ではそれなりのものが作れている。

とはいえる詮は野郎と舌の肥えていないお子様、とりあえず肉があれば喜ぶ一人だったので料理の腕もレパートリーもそれなりにあります。

ハナコさんのような他人に自慢できるレベルの弁当は作れやしない。

い。

まあ、ハナ「さんは食堂を経営する正真正銘のプロだから敵な
くて当然だと思つけど。

「凄いですね。私も時々作りますけど、毎日はとても
「あはは。そんなものですよ。私も一人だったら絶対作つてません。
息子の食事を用意するついでみたいなもんですから」

「良いお父さんですね」

「いえいえ、お恥ずかしい。息子にはしようと文句を言われて
ますし、雑つて」

「あらあら」

「そう、たいしたものじゃないのに褒められては照れる。もちろん
お世辞だとわかつていてもだ。」

「それにお弁当なら外に買いに行かなくて済む分、趣味の時間が確
保できますし」

そういうて「デスクの引き出しから」ラーの詰まつたケースを取り
出してみると、少し呆れ気味の苦笑を浮かべられた。むう。

PIPIPI！ -

お、ポケギアにメール？ 誰から……社長か。ってことは呼び出
されるな。

「おーい、ハマサキ君」

ほら来た。

「はい、なんでしょうか部長」

「休憩中に悪いが急いで社長室に行つてくれないか
「えつと、用件はなんでしょうか？」
「どうせ、いつもの呼び出しだろ」

そう言いながら課長はテスクの上のルアーケースを指差した。

「まあ、急ぎと言つていたださうすぐ行つてくれたまえ。悪いな
「いえ、そんな課長が謝ることでは……では、ちょっと失礼いたし
ます。もし、休憩中に戻らなければ」
「ああ、大丈夫だ。いつものようにこつちで引き継いでおくから
「すみません。それじゃあ行つてきます」

話の途中だつたので同僚にも一応断つておく。

「そういうわけですねん
「いえいえ、お構いなくー」

まったく、社長には節度を守つて欲しいもんだ、と万年人手不足
にあえぐ総務部の部長の心からのはやきを背に聞きながら私はエレ
ベーターへ向かった。

「おお、来てくれたかタダノ君。休憩中にするまいね」

社長室のドアを開けてみれば幾分疲れた表情で社長が出迎えてくれた。

「緊急の用件みたいですが、一体何が起きたんです？」

ハマサキではなくタダノと呼ばれたので趣味の話でないことは明らかだ。もつとも、そんなことは直前にももらったメールでわかつていたことなのだが。

「いや、何。急ぎといえど急ぎなんだが、緊急といつぱりのことではないよ。ただ、私のほうで時間が取れなくてね。こんな急な呼び出しになってしまったのだ」

「はあ」

「午前中だけで会議に3つ、このあともしばらくしたら出かけないといけない。まったく、年寄りをこき使つなんてシルフは怖い会社だよ」

思わず、あんたの会社だら、と内心で突っ込む。口に出さない。シルフは怖いのだ。

「ははは……」

ひとまず苦笑いで誤魔化しておぐ。

「まあ、あんまり冗談を言つてこない場合でもないんだな。ひとつと本題に入ろう」

笑いどりのつもりだったのか。

「実は3日前にポケモン省と警察からある調査を頼まれていた」「警察と……ポケモン省から、ですか？」

ポケモン省はこの国の行政機関のひとつだ。ポケモンジムの認可および取締りや、地方等に存在する国営化したジムの運営、ポケリソピックの招致、トレーナーカードの発行、新人トレーナーへ奨学ポケモンの支給（いわゆる御三家）などポケモンに関係するあらゆることを担当している。

ポケモンセンターやトレーナー協会も管轄はここだ。

「いくらシルフカンパニーがポケモン関連商品の世界シェアトップといえど、国が民間企業に何のようです？　まさか選挙関係ですか？」

「いや、そういうたものではない。省のお役人が言うには先日、トキワの森のポケモンの生態系について調査を行つた際にピカチュウが異常なほど少なくなつていたらしい」

「そういえば、今朝、そんなニュースが流れていたような……もしかすると人為的なものかもしないとかなんとか。ですが、それと我々に何の関係が？」

もしどのポケモンの乱獲や密漁で法に触れる行いをしているものがいたとしても、それを取り締まるのは警察の仕事である。

私がタダノとして働くときは私以外に対処が出来ず、かつシルフカンパニーに対して、何らかの損失が出た、もしくは出る可能性のある場合だけ。正義の味方ではないのだ。

「8日前の深夜、トキワの森でロケット団らしき集団が目撃された。

警察が向かつたときには既に逃げ去られたあとだつたが、現場に妙なものが残されていたそうなのだ

「妙なもの?」

「うむ。我が社が頼まれたのはその遺留品の調査、解析だ。警察やポケモン省でもお手上げだつたらしい。ロケット団がらみなのでおよそポケモン関連だらうと」

ロケット団は逃げるのが本当に速く、そして上手い。退くと決めたらあつという間だ。そして痕跡もほとんど残さない。

後手に回つてしまつ形なので、唯一の手がかりに警察は外部や民間に協力を頼んででも時間が惜しいのだろうな。

遺留品を残したという奴はロケット団の中でもよほゞのまぬけか、ひよっこに違ひない。

「なるほど。確かに我が社はポケモン関連の道具に関してならば世界一の技術力を持つていますしね。ですが私をお呼びになつたということは、何か?」

「そうだ。我が社の研究チームによつて、その遺留品には極至距離に存在するポケモンの持つわざの威力を、わずかにだが上昇させる機能がそなわつてゐることがわかつた」

「すごいですね。我が社でもまだ実用化に至つていない威力アップアイテムですか」

あつちでのゲームでいう、もくたんやきせきのたね等に相当する道具だらうか。

「ああ、うちでも研究開発のプロジェクトが進行中の代物だ。が、残念なことに試作品を作ることすら難航してゐる。どうにも技術的にブレイクスルーが必要らしい」

「なんだかもつたいびりますね。つまり、私に何をさせたいんです

か？」

私の言葉に社長は、なんてことないかのよつに答えた。

「なあに、簡単さ。ちよつくりやつらのアジトを突き止めて技術を奪つてきてくれたまえ」

ヤマブキシティ シルフカンパニー本社 社長室

「その、今、なんど?」

社長のあまりの発言に思わず聞き返してしまった。

「聞こえなかつたかね?」

「いえ、あの、ちょっと信じられない発言を聞いたような気がします。あと、とんでもない無茶振りをされたよつた気も……」

他社の技術を奪つて来いなどと、世界一の技術力を持つ企業の社長が言つていいことではないだろう。

自社の力を信用していないとも取れる発言だ。そのうえ犯罪行為である。

「君なら口ケツト団から技術を奪つてくれるのもできるだろ?」

「お言葉ですが社長。存在するかどうかも判明していないアジトに、いきなり潜り込んで来いと仰られても……。そもそも連中のアジトはそこいらじゅうにあります。幹部クラスの団員でもそのすべてを把握しきれていませんでした。今回は遺留品がどこアジトで行われている研究の結果なのかを調べるところから始めなければいけないので相当な時間がかかりますよ」

「そういう研究をしていたアジトに心当たりは無いのかね？」

「……無い、ですね。自分がシルフに来てから始まった研究なんだと思いません」

「しかし、警察じゃ気付かないような手がかりも君なら見つけられるだろう？ 連中に聞いて君ほど詳しい人間は居ないわけだし」

「探ししてはみますが、正直期待は出来ないかと。口ケット団の痕跡を残さない手際は徹底していますから」

「だが、今回はこのとおり遺留品が残っているじゃないか。可能性は低くないと思うんだがね」

「たしかに今回のようなケースは珍しいですが、だからこそ既に手を回し終わっているとも考えられます」

「ふむ。まあ、探すだけ探してみてくれないかね。一週間だけでいい」

「それは構いませんが……そもそも何故、奴らから技術を奪う必要があるんでしょうか？ ことポケモンに関してならシルフの技術力は世界一です。今はプロジェクトが滞つっていてもうちの優秀な研究者と技術者たちなら近いところに成功させると思いますが」

「はっはっは、シルフの社員の優秀さは私が一番知っているぞ。シルフは今でも、そしてこれからも世界一のポケモン関連メーカーだ」

「 でしたら技術を盗んでくるなど、眞面目に研究している彼らの顔に泥を塗るような行為では、」

「 とんでもないぞ！ いいか、ハマサキ君。我が社の技術力は世界一だ。同じものを作らせたなら我が社が一番品質の良いものを一番早く開発するだろう。だが、口ケット団はこいつして既に実物を所持していた。君はやつらがこれを真っ当な手段で作り上げたと思っているのか？」

「 まあ、 まずそれはないでしょ？ 」

「 ああ。口ケット団の持っているものがどこから出ているもののかは君がよく知っているはずだ。ある筋から、我が社がわざ威力上昇アイテムの研究開発を始めたほぼ同時期に口ケット・コンツェルンもほぼ同様の研究に着手していたことが判明している。これは技術力で勝るはずの我が社が口ケット・コンツェルンに遅れをとつたということだ。これが他の企業ならば疑いはしない。我が社の努力不足かもしれないし、運が無かつただけかもしれないし、相手が一枚上手だったのかもしれない。だが、口ケット・コンツェルンとなれば話は別だ」

「 やつらは口ケット団と繋がっているのだろう？ いや、 ほぼ同一の組織と考えても構わないのかな」

「 そのことは私が一番よく知っている。」

「 ええ。証拠はありますか？」

私の合いの手に構わず社長は話を続けた。

「ロケット団は非道な研究を平氣で行つ。合法か非合法かを問わず、ポケモンの乱獲や生体実験など当然のようにだ。それは時に法に則つて研究を続ける我らよりも進んだ技術の獲得に繋がつてゐる。今回件もその一つだと私は睨んでゐるのだよ。もしも、そんな不正の結果が我が社よりも先に世に出回ればどうなる。シルフはある犯罪者どもに負けたも同然。奴らの行いを知らない世間一般の評価もロケットコンツェルンの技術力はシルフに勝るというものになりかねん。それは我慢ならん。この事態を見過ごすことこそ我が社の研究員たちに対する背信行為だとすら私は思つ」

世間の人々はロケット団とロケットコンツェルンの繋がりを知らない。だから製品が世に出回つても、単純にシルフがロケットコンツェルンに先を越されたと思うだろ？

別に製品の発売が多少遅れたとしても、それだけでシルフがロケットコンツェルンに負けることはない。

が、正々堂々の競争なればともかく、反則行為を行つた相手を見逃す理由にはならないということか。

まあ、それ以上に社長個人が面白くないというのが大きそつだが。

「今、この件に関わつてゐる人間でロケット団とロケットコンツェルンの繋がりを知つてゐるのは君と私だけだ。つまり、我が社の名譽を守り、奴らの不正を正すことが出来るのも我々だけだ」

抑揚をつけ、少しばかり語氣を強めて話す社長。

聞けば聞くほど、彼の語る言葉がどんどん重みを増していく。私はそう錯覚しそうになつた。この感覚は久しぶりだ。

社長は熱意を言葉にしてゐる。本心であるのは間違いない。が、行為そのものは意図的だ。

サカキもそうだった。まあ、奴は意図せずとも人を惹きつける男だったが。

「これはシルフカンパニーの社長として君に命じる必要のある」と
だ。そして君はシルフの社員として従わねばならない。君にとつて
はある意味古巣を叩くよつたものだから、気は向かないかもしけな
いが……」

「いえ、お気になさりやない。今の私は奴らとは無関係ですか？」

気付いたところで、このまま社長の話術に乗せられて困ることもない。自覚している分だけ気恥ずかしいことくらいだ。

個人的には大人の中二病に付き合つのは少々気が進まないのだけれど、仕事となれば話も別である。

お給料を貰つて居る身だし、過去の所業を隠してもうつていておかげで息子は平和に暮らしている。

……どうせなら大義名分を掲げて気持ちよく仕事がしたい。ならば乗せられてもいいじゃないか。

ふいに……なんとも自分が情けなく感じて、こんなところは息子に見せたくないなと思つた。

「そうか。頼んだぞ特命係長！」

「はい。社内安全課実務係長タダノ行つてまいります」

私は敬礼して返事をした。

ノリに付き合つのなら最後まで、なんて開き直つた態度からなのが、この敬礼が昔、今から忍び込もうとしている組織の下つ端だったころに叩き込まれたものだと気付いて、慌てて腕を下げた。

……なんとも締まらないものである。

「いい？ ポケモンをケアしてあげると、そのポケモンによって喜ぶ方法っていうのは違うの。間違った方法だと返ってストレスになっちゃうこともあるわ。そうね、例えばジゴンは氷水で冷やしてあげると喜ぶけどナゾノクサに同じことをすると体調を崩しちゃつたり」「

ナナミは田の前少年に自分の知っている知識を語り聞かせながら、床に寝そべるパリッタの背中を小型のブラシでブラッシングしている。その手つきはとても優しい。

パリッタもリラックスした様子でされるがまま、ときおり気持ち良さそうにあくびをしている。

「うと……なんとなくだけ、わかる。父ちゃんも似たようなこと言つてた」

ナナミの言葉に耳を傾け、彼女の手元を熱心に見詰めてくるのせカトシだ。

「でもね、どんなポケモンでも喜んでくれる魔法みたいな方法があるのよ」

「どんなポケモンでも？」

「アハ。 しかもとっても簡単なの」

美人のお姉さんの茶田つ氣たつぶりなワインクに、サトシは少し赤くなつた。

照れ隠しのよつて早口でたずねる。

「どんな方法なの？」

ナナミはその間に答える前に「ブリッジングの手を止めて、『ブリッジタの背にやんわりとのひらをあてた。

「うわやつて、やれじや手で撫でてあげるだけ。簡単でしょ」

「撫でるだけ？」

「そうよ。傷を治療することを手当して言ひでしょ？ 病気になつたときや、辛いときは誰かにそばにいてもらつだけでも不安が和らぐものよ。それはポケモンだつて同じ。だから手を当てて、自分がそばにいる、ついててあげるつて教えてあげるの」

サトシは自分が風邪をひいて寝込んだときのことを思い出した。休みの日でも仕事にいくことがあるほど忙しい父親が、そのときばかりは仕事を休んでそばにずっと居てくれた。

熱が出て頭が痛み、汗で寝巻きがはりついて寝苦しく、ぐずつてしまつた。そのとき落ち着かせるように、額に乗せられた父親の手のひらはひんやりとして大きかつたのをよく覚えている。

「病気や怪我をしていなくても、直接触れ合つことは大事よ。バト

ルのときだけ呼びだすんじゃポケモンも寂しいでしょ」

「うん…… そうだね」

「最近は連れ歩きつていってボールから出して一緒に出歩く人もいるわね。怖がる人もいるから、何匹も出したままにしたり、大きいポケモンを街中で連れ歩くのはまだ難しいところもあるけど、私はいいことだと思うな」

「連れ歩き…… ギヤラドスは大きすぎるかな？」

「そうねえ。ちょっと連れ歩くには大きすぎるわね。でも、とりあえず撫でてあげるのはギヤラドスも喜ぶと思つわ」

「うん、毎日撫でてるよー」

「あ、でもポケモンによつて撫でて良いこと悪いこともあるから気をつけてあげてね」

「えつ」

「たしかギヤラドスも触ると嫌がるといひがあつた気がするわね」

「ど、どこへ？」

「ごめんなさい、忘れちゃつた」

「えー」

ふてくされたサトシに苦笑するナナミ。

「トコミングをしてげるときもね、ポケモンが落ち着いて受けられるようにまずは優しく撫でてあげることが大事なのよ。私は貴方を傷つけるつもりはありませんよつて最初に教えてあげるの」

「へえー」

「じゃあ、サトシ君。この子を撫でてあげてみて」

「うん」

「ハラタの背に向けてそろそろと手を伸ばすサトシ。

自分のギラードス以外のポケモンに触れるのは初めてのことだ。ほんの少しだけ、おつかなびつくり。

ふあわつとした少し固めの毛並みと暖かい体温を手のひらで感じると、笑顔になった。

「あつたかいや」

「あつたかいや」

「サトシ君はどうして急にポケモンブリーダーの勉強をしようと思つたの？」

今、行つてゐるナナミの特別授業はサトシから願い出たものだ。

ポケモンマスターを目指してお父さんから聞いていたけど、と続けたナナミにサトシは少しだけ落ち込んだ顔で答えた。

「勉強が苦手なんだ」

疑問が顔に浮かんでいるナナミを無視してサトシは続ける。

「本を読んでもだんだん頭が痛くなつてくるし、机にじっと座つてのもあんまり好きじゃない。だから、前はずつとコイキングと外でバトルしてた」

「でも、いつのまにかシゲルもポケモンマスターを目指して父ちゃんに勉強を教わつてた。あいつ、難しい本もたくさん読んで毎日必死に勉強してゐる。学校の休み時間もだよ」

「シゲルの勉強つて、ぼくよりずっと先に行つてるんだ。前、父ちゃんにシゲルに教えてることと同じことを教えてつて頼んだら、教えてくれたけどほとんど理解できなかつた。ぼくのほうが先に教

わってたのにや」

「なんとか追いつこうと思つて、頑張つて勉強してみたけど……まくが進んだ分以上にシゲルは先に進むんだ」

「父ちゃんは『お前は身体で覚えるほうが得意なタイプだ。旅に出ればぐつと伸びるだらうから、今はあんまり気にしなくてもいい』って言うんだけど……」

「それでも、毎日頑張るシゲルを見てたら、このままじゃいけないって思つちゃうんだ。ギャラドスがいるからぼくの方が先にトーナーになつてるけど、すぐ抜かれて置いてかれるかもつて」「だから、勉強で敵わないならもつとギャラドスと特訓しておこうと思つて毎日、くさむらやトキワシティでバトルしてるんだけど……同じポケモンばかり相手にしてるからか、最近はギャラドスがんまり成長しなくなつてきてるっぽくて」

「何か、他に出来ることはないかって考えたの。そしたら父ちゃんが前にバトルでもコンテストでも、ポケモンは生き物だから育て方が大事つて言つてたのを思い出して」

だからナナミお姉さんにお話を聞いつけたんだ、とサトシは言つた。

「……サトシ君は凄いんだね」

黙つて話を聞いていたナナミは驚いていた。そして感心していた。

「凄くなんかないよ。シゲルはもつと」

「ううん、凄いよ。自分で何をすればいいか、どうすればいいのかつてちやんと考えてるもの。そして行動できる」

「でも……」

俯きがちに暗くなるサトシの顔を両手で包み、持ち上げる。

「ほーら。下向いてひがだめ。もつと血信をもつて? サトシ君はもつと凄いトレーナーになれるから。ね?」

「う、うそ」

「よし。」

クルッポー、と壁に立てかけられた時計が鳴った。16時だ。

「あら、もうこんな時間なのね」

「あつ、『めんなさい、ナナミお姉さん。ぼく、このあと友達と約束があるんだ』

「これから、もう夕方近くにみわよ?」

「うん。クラスメイトがトキワのトレーナースクールに通ってるから一緒に付いていくて、少しだけ見学させてもらひの。もしかしたらレンタルポケモンでバトルもさせてもらえるかもって」

「あら。それじゃあ今日はここまでね」

「うん! ナナミお姉さん。今日はありがとうございました!」

「いいえ、トレーナーの勉強、頑張ってね」

「はい!」

玄関から飛び出していく少年を見送つて、ナナミは呟いた。

「……ライバルは手にわいわよ、シゲル」

ナナミの背後、階段のてすりのしたから隠れていたシゲルが顔を出した。

「気付いてたのかよ、ねーちゃん」

「当然じゃない。私のところからはあんたの、そのシンシンした頭が丸見えなんだもの」

「髪型のことはこうな！」

「まつたく。サトシ君のことが気になるなら直接話せばいいのに。二人とも意地になつて会いたがらないんだから。遊びたいなら前みたいに一緒に遊べばいいじゃないの」

「そんな暇ない！」

「ま、精々がんばりなさい？」お姉ちゃんは応援してくるからね

やつこつてナナミは微笑んだ。

島子ヒビカチュウ 4（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

少しだけ修正しましたが話の流れが大きく変わったというわけではないです。結構重要なことを書き忘れていたような気がしたのですが、思い出せなかつたので今回は少しだけ描写を追加変更した程度です。

思い出したり、ご指摘いただいたりしたらまた次の機会に修正するかもです。

カントー地方 最北部 山林内

時は少しさかのぼり、日曜日の深夜。

カントー地方から北、遠く離れた場所にあるロケット団の研究所から大量のコンテナが輸送用の大型貨物機へと積み込まれていた。ときおり中から異音が聞こえてきたり、ガタゴトと激しく揺れるコンテナもあるが団員達は気にせず積み込み作業を続いている。

「作業は順調ですか？」

青みがかった短髪に切れ長の目の中の男が、積み込み作業を監督していた年配の団員に声をかけた。

「ハツ、予定通り〇二：〇〇には出発できるものと思われます」

声をかけたほうの男は周囲で作業している団員と異なり、白い团服に身を包んでいた。

キツネのような印象の面構え、口元に添えられた手がインテリのような印象を与えるこの男はロケット団の幹部、アポロである。

「そうですか。わかつているでしょうが既にレンジャー・ユニオンも動き出しており、スケジュールに余裕がありません。さつさとここを廃棄してしまいたいので何か後々困りそうなことなどがあれが今

「ついに報告してください」

「撤収作業のほうには問題ありません。ただ……」

「なんですか？」

「実は例の新人たちが勝手にトキワの森へと向かつたようにして、未だに戻つてきていません」

間抜けどもと聞いたあたりでアポロの類がかすかにひくついた。例の新人たちとは、計画を中断して研究所ごと移転しなければいけなくなつた原因を作つた団員たちのことだ。

ひとまず撤収作業を優先したために移転が完了するまで研究所内の一室で待機を命じられていたはずだったのだが、トキワの森へ行つてきますとだけ書いた書置きを残して居なくなつてしまつたらしい。

「……ほおつておきましょ」

「ですが、あのあたりには既に警察やレンジジャーが

「構いません。彼らが捕まろうがどうなろうが何の問題もありませんから。この場所が知られたところでもう廃棄しますし。研究に関しても計画の概要すら知らせていませんからね。元々、捕獲要員の埋め合わせで近場にいたのを臨時召集しただけなので。彼らにはピカチュウの捕獲を命じましたが、こういうときのために本当の目的がでんきだまの収集であることまでは教えていませんでしたから」

この研究所では極稀にピカチュウが生まれつき持つてゐる、でんきだまという道具の研究を行つてゐた。でんきだまは接触してゐるピカチュウの能力を飛躍的に上昇させる効果がある。

野生のポケモンが極稀に所持している道具のなかにはこういった特定のポケモンを強化するものが存在しており、現在口ケット団ではその原理を解明して兵器や商品へと転用するプロジェクトが幹部の一人、アポロの指導ですすめられていた。

そしてその研究は数々のピカチュウを犠牲にして実を結びかけた。数日前に試作品を紛失するまでは。

「そうだったのですか？ 新人の中でも期待のエースと聞いていましたが」

「サカキ様も目をかけていたそうですよ。今となつては信じられないことですけどね。まあ、任務を失敗するだけならばともかく、計画そのものにまで支障を出すようでは話になりませんよ」

苦虫を噛み潰したかのような表情でアポロはそう吐き捨てた。

「試作品を移送中の団員と仲間割れしたうえに警察まで呼ばれて、拳銃の果てには試作品を失くしてきましたからね」

身内同士のいざいざという予想外のトラブルにより、試作品を紛失。それだけならばともかく、物は国家権力の元へ渡つてしまつた。このまま研究を続けて口ケットコンソエルンから商品化や軍事転用を行つたとしても口ケット団との繋がりを疑われる可能性が出来るのはあまりよろしくない。

そういうた判断の元、この研究所はただちに閉鎖、廃棄することが決定した。

もつともプロジェクトそのものが白紙になつたわけではない。口ケット団内部でのみの使用に限れば有用であるには違ひないからだ。

とはいっても、大幅に縮小することが決定したのは間違いない。リターンの薄くなつたものに費用を投じ続けるのは無駄というサルキの指示だ。

ロケット団にはこの研究所ほどの進んではいないが似た研究を行つてゐる研究所がいくつかあり、これまでの研究成果や機材はそちらに応用されることとなつてゐる。

他の研究所ではカラカラ、ガラガラのほねこんぼうやパールルのしんかいのキバなどを研究しているのだが生息数および生息域と検体の確保難度の差によつてこの研究所が一番進んでいた。

「ロケット団に集団行動も出来ないような無能は要りません。幹部の真似して白い団員制服を自作し、常時着用しているだけでも規則違反だというのに、それが原因で人目を集めて警察沙汰だなんて言語道断です。サカキ様は多少の失敗ならば笑つて許してくださいる寛大な方ですが、彼らはそれ以前の問題です」

一転して薄ら寒いものを感じさせる微笑。

アポロは自分のプロジェクトに水をさす原因となつた新人達に腹の内が煮えくり返るかのような気持ちを抱いてゐるのだ。それを察した団員は自分のことではないにも関わらず、上司の意識をこの話題から逸らしたくなつた。

「例の新人たちについては了解しました。ですが、もう一点あります」

「なんですか？」

「実は新人たちは捕獲した実験体のピカチュウを一匹、勝手に持ち出したみたいでして……」

「本当に碌なことをしない人たちですね……」

「いかがいたしましょう?」

「ピカチュウが一匹減ったところで計画に影響はありません。実験中に薬を使つたりはしましたが、薬自体は検出されたところで我々に辿り着くようなものではありませんし。むしろ新人達のところへ人間を送る手間がもつたいない。構わずに引き続き作業のほうを進めてください。時間はそつ多くないですからね」

アポロは部下の団員にそう言つと研究所内へと戻つていった。
そして淡々と積み込み作業は続けられ、予定通りの時刻に貨物船は飛び立つた。

その翌日、研究所は入念に爆破処理されたあと埋め立てられた。

トキワの森。

それはトワシティとニビシティをつなぐ2番道路の途中に存在する、カントーでは最も有名な森林である。

この森は古くから地元の人々に愛されてきた。

2番道路も当初は森を切り開いて作る予定だったのだが地元民から大きな反発を受け変更することになり、トキワの森にはトキワ側とニビ側に出入り口を設けて順路を作ったという逸話があるほどだ。多少入り組んではいるものの、多くの立て看板が各所に設置されており、生息しているポケモンに特別危険な種も居ない。順路の途中にある草むらも定期的に刈られているので子どもだけでもポケモンさえ持つていれば比較的安全に歩ける。

あえてあげるならばスピアーなどの毒持ちポケモンの存在がやや厄介なくらいだ。とはいえる間は人通りもそれなりに多く、たとえ襲われたとしても自分のポケモンさえ持つていれば、出入り口の休憩所まで逃げ込むのも難しくないとされていた。

また、夜になると出現するポケモンの種類が変わり危険度は増すが、そもそも夜間に10歳未満の子どもは出入りを禁止されているためさほど問題になつてはいない。

そのためか駆け出しトレーナー や地元の子ども達には格好の遊び場となつてあり、虫取りあみ片手に走り回る少年達の姿がよく見られる。

そんな歴史ある森の中で2人の若い男女と1匹のポケモンが言い争いをしていた。

男女は口ケット団の制服を着ていたが、それを踏まえてなお奇妙な格好だった。白い団員に胸元にでかでかと赤字でRと描かれている時点で隠れ忍ぶ気がまったく無い。

「ちょっと一ヤース！ ピカチュウなんて全然出てこないじゃないのー。この森にいるってのは本当なんでしょううね！？」

地面まで届きそうなほど長い赤髪をすべて後ろに流し何をどうやつてか浮かす、という不思議な髪型の女性が足元のニヤースに怒鳴つた。

怒鳴られたニャースも不思議なもので、なんと人の言葉で言い返した。しかも一本足で立ち、掲げた前足には本まで掴んでいる。神秘のにくきゅう。

この世にも奇妙な「ヤーハー」は、口ゲンコツ圓眞心得 著「ヤーハー」と書かれた本をめぐり、ほらこじ「ヤ、と女性に向けて差し出した。それを女性はひつたくるように受け取る。

「……あり、ほんとだわ。つて、だつたら出でないのな余計なあ
かしこじやないのっ！」

「そんなこと言われたつて一ヤア……」

「なあ、俺思つたんだけど」

ヒステリック気味に叫ぶ女性と困り顔のニヤースの会話に、それまで思案顔で黙っていた青年が口を挟んだ。

「なによ?」

女性に比べると外見的にインパクトの薄い青髪の青年はおおげさに

両手を広げて自分の考えを述べた。

「もしかして、『』の森にはもうピカチュウが居ないんじゃないかな？」

「『』ヤー？ でも『』の本には」

「いや、だからさ。その本って入団してすぐ『』賣つやつだろ。だったら他のやつらも当然田を通してるわけだし、真っ先に『』を狙つたんじゃなにかってことだよ」

「「あ」」

……彼らの会話は、聞か空いた。まさしく間抜け、である。

「なんでもっと先に言わないのよー。」

「いや、そんなこと言われたって俺だって今氣付いた、って痛つ痛い！ やめろムサシッ！ やめてくれッ！」

バシバシと女性が男性を叩き、男性は頭を両手で抱えてそれから逃げまわる。

「ハア……『』ヤー達はいったいなんのために『』まで来たんだか。ピカチュウが居ないのならおみやーを連れてきた意味もなかつた『』ヤア！」

『』ヤースは『』の隣を向いてぼやいた。

チュウ、チュウ、

『』ヤースの視線の先には小型の檻に入れられたピカチュウが唸り声

を上げて彼らを睨んでいた。

頬袋からは電気が漏れ出ており、ギザギザの尻尾もピシと立てている。

「うだよなあ、と追い掛け回されたすえに打ち据えられてしまった青年、ゴジロウがぼやいた。

「ピカチュウを連れているとぐんきタイプのポケモンが出やすくなつていうから連れてきたけど、そもそもピカチュウが一匹も居ないんじゃなあ」

「ピッ、カツ、チユウウウ！」

息を大きく吸い込み、身体を反らした身体を一気に丸め込むようにしてピカチュウが力む。

すると、許容量を超えて今にも爆発寸前の機械に似た異音を発して、いた過電流が、爆発するかのように電気袋から放出された。が、流れ出た電気そのものは絶縁性の特製ケージに阻まれ、ロケット団を襲うことはなかった。

ピカチュウは電撃を放出しきるごくつたりとケージの底に倒れふしだ。

連れ出してから幾度となく繰り返された無意味な抵抗をもはや気にするにともなくロケット団は会話を続けていく。

「んじゃあ、どうすんのよ。失敗を取り戻すためとはいえ勝手に抜け出した上に」ここまで無断で連れてきてんのよ？ こまさら手ぶらで戻れってこのの？」

「うーん。じりや本格的にまづくなってきたー」ヤア

「まあくなつてきたニャースのぼやきにムサシが声を荒げる。

「ただでさえヤマトたちが一方的に責任を押し付けたせいで悪いのは全部あたし達みたいになつてるので、これ以上失敗したらボスに見捨てられるかもしれないわよー？」

ヤマトとは試作品の実地実験の任務にあたつていた同じロケット団員の一人だ。ムサシとは折り合ひが悪く、顔を合わせるたびにいがみ合つてゐる。

そして、ヤマトとその相棒はムサシたちと任務がかち合ひと必ず失敗するという珍妙なジンクスを持つてゐる。

実際、ジンクスのせいかどうかはともかく、今回も偶然トキワ付近でポケモンの捕獲をしようとしていたムサシたちと遭遇し、罵り合いの末、深夜にも関わらずポケモンバトルに発展。騒ぎを聞きつけた現地住民に警察を呼ばれ、慌てて退散する際に試作品を紛失するというミラクルな失敗をしていた。

「ぐつ

「そ、それだけは勘弁ニヤ！」

彼らは今回の件に関わるまでは新人のロケット団の中では活躍をしているほうであつた。ボスのサカキは有能なものにはそれに見合つた待遇を設ける男だ。

ムサシとゴジロウは特別報酬としてそれぞれアーボとドガースを貰つたことがある。その際、ニャースは自身がポケモンのためポケモンを貰うことはなかつたが、サカキの特別の計らいで食べ物を支給された。

彼ら三人組（？）はロケット団に入るまでそれぞれに苦労をしいる。挫折も多く経験し、夢を諦めたこともある。努力して結果を出しても報われないことが多かった。

そのことは彼らの「インプレックスとなり、世の中への不満となつた。自ら悪の組織に入団しようとするほどにだ。

だがロケット団に入つてから、彼らの人生はがらりと変わつた。結果を出すたびにロケット団という巨大な組織のボスがわざわざ自分たちの努力と結果を認めてくれるのだ。そのことに彼らは感動した。

社会のつまはじき者だった自分たちだが、居場所を見つけられた気がした。

そして、いつしかボスのサカキに無類の忠誠を誓つほど心酔するようになつた。

だからこそ、ボスに無能と断じられ見向きもされなくなることが彼らは怖い。

「なんとしてもピカチュウをたくさん捕まえて戻るのよー。」

「でも、ここにはもうピカチュウは居ないんだ。どうすんだよ」「近いところでどこか他にピカチュウが住んでるところなんてあつたかニャア……」

腕を組んで悩むロジロウと本のページをめくるニャース。

そこでハツと何かに気付いたムサシが腰に手を当て胸を張る。

「……あんた達、なーに言つてるのよ。あたし達はロケット団ですよ。悪よ、悪。地道に野生のポケモンを探すなんてまじめにしないことしないで他人のポケモンを奪えぱいいじゃないの」

「あ、そつか、ナイスアイディア」

「おー、こやーるほどー！ ムサシ、冴えてる！ ヤア」

一人の賞賛に得意げな表情でポージングするムサシ。

「ふふふー、そうでしょそうでしょーー！」

「あ、でもさ。それだとピカチュウを持つてるトレーナーを探すところから始めるといけなくないか？」

「それに一人で何匹もピカチュウを持つてる奴なんてそう都合よく居るわけニヤーから、たくさん捕まえるには何人も襲わないといけないニヤ。この案もやっぱダメかも知れないニヤア……」

「だーいじょうぶよ、それならあたしに心当たりがあるから

「なんだよ心当たりって？」

ふふふふ、と顔をニヤつかせてムサシは答えた。

「ポケモンセンターよ。あそこなら万が一停電したときのために自家発電用のピカチュウが何匹もいるはずよ」

「凄いなムサシ！ そのピカチュウたちを手に入れれば万事解決じゃないか」

「つーむ、これはどうした」とニヤ、今日のムサシはなんだか輝いて見えるニヤ

「もひ、やーねえ、あたしはこいつでも輝いてるわよ」

「よーし、やうとなれば善は、じやなかつた、悪は急げだ！」

「さつそくポケモンセンターを襲撃するニヤ」

「たしかにこれから一番近いのは……」

「どことなくコミカルな連中だが、腐つてもロケット団。考えぬことは結構な悪事であった。

さあ、具体的な作戦を立てよつとロケット団（三人組？）が悪事の相談を始めたところ。

「ヴォウツ、ヴォウツ！」

「な、何だ！？」

突如、森の木々の間から彼らに向けて吠え声が飛んできた。

さらに少し遅れて、ピピーーー！…と、甲高いホイッスルの音も鳴り響く。

「つあなたたち、その格好はロケット団ね！？ 逮捕します！」

そうして茂みを越えて姿を現したのは赤と黒の縞々に白いたてがみを備えた子犬のようなポケモン、ガーディと青い制服を着た婦警、ジユンサーだ。

さらにその後ろから右肩にプラスルを乗つけた少女もついてくる。

明るい色合いの活動的な服装と動きの邪魔にならないように長い髪をまとめてくくつたその少女はポケモンレンジャーであった。

ポケモンレンジャーはポケモントレーナーとは異なりボールで捕獲するのではなく、腕に装着したキャプチャーバンドなどの機械を用いて、野生のポケモンの力を一時的に借りることで災害救助などを行う職業だ。

そのため自然環境の維持も彼らの仕事の一つであり、今回トキワの森のピカチュウが激減した原因の調査にこの少女が派遣された。彼女は相棒のプラスルと共にトキワシティのジュンサーのパトロールに同行し、ミッション解決の手がかりを探していたところであった。

「つそのピカチュウつ！？ やっぱりロケット団との森のピカチュウの数が減っているのには関係があったのね！」

悪事を働く前にいきなり見つかる不運。不意をつっこなれば得意だが逆にうたれるととても弱いロケット団（三人組？のみ）であった。

「げげつ、び、どうする

「あー、もう。と、とにかく逃げるわよ！」

「わかつたーヤ」

すたこらせつさ、とばかりに背を向け走り出すロケット団（三人組？）うつかりピカチュウの檻を置いたままだ。

「キャタピー、ことをほくー！」

レンジャーの少女はトキワの森に入つてすぐキャプチャしておいたキャタピーに支持を出す。

キヤタピーの口から勢い良く飛び出した白い粘着質の糸は瞬く間にロケット団へとまとわり付いて、三人まとめてその動きを封じた。

「くっそー！」

「きー、放しなさいよー！」

「ニヤーたちはまだ何もやつてないニヤーー！」

「ピカチュウをこんな檻に閉じ込めておいて、よく言つわね」

レンジャーの少女が檻に閉じ込められたピカチュウの元へと歩み寄つていく。

するとピカチュウは少女に対しても電撃を発して警戒心をあらわにした。それはとても弱弱しいものだったが、明らかに拒絶であつた。電撃に退くことなく、少女の手が檻に指し伸ばされるとピカチュウは狭い折の中を後ずさり怯える。

その姿に居た堪れなくなつた少女は、大丈夫よ、と優しく声をかけ檻の鍵を開けた。

そして檻の戸が開いた瞬間、ピカチュウは目にも留まらぬ速さで飛び出し、森の中へと逃げていった。

「あ、あなたたち、あのピカチュウにいつたい何をしたの……？」

少女の震える声。そこには怒りが混じつっていた。

「し、知らないわよ！」

「詳しいことは署で聞かせてもらいます、おとなしく捕まりなさい

手錠を手に持ち、厳しい顔で、必死にもがくロケット団のもとへ近づいていくジュンサー。

「な、なんだかとつてもやな感じい！」

こうして間抜けな口ケット団は捕まり、事は口ケット団幹部アポロの予想通りになつていく。

「キングダム、えんまくー。 デククラゲ、ちゅうおんぱー。 マンタ
イン、あやしいひかりー。」

ことはなかつた。

スタンつと突如、空から降つてきたスー^ツ姿の男。先に出現させた三四のポケモンへ立て続けに指示を飛ばし、状況を一変させた。

キングドラの口元から大量の噴煙が巻き起し、瞬く間に周囲を満たして視界を奪った。

さらに「ブオオッ」と身体を震わせたドククラゲ周囲から衝撃波のよつた超音波が発せられ、聴覚と三半規管を乱していく。

そこへ、マンタイン音発した怪光線が煙幕の中を乱反射。

「な、なにっ！？」

「きや、きやああ

「つおわああ

「一ヤンだコレ、皿が回る一ヤあー！」

グ、グルウ

人もポケモンも見境なくすべての対象が混乱したのを確認すると男は次の行動に移った。

「よし戻れ！ 来い、フーディン！」

ポケモンたちをボールに戻し新たに呼び出したフーディンを連れて三人組の元へ駆け寄る。

「な、なんだお前ー？」

ムサシの長い髪が視界を埋めていたおかげでからうじて意識を保つていられたコジロウが叫んだ。

「なんだかんだと聞かれて、普通は答えてやりやしないぞ？ が、あえて言つならば我々はどこにでもいる、ってところか

「そ、それってつまりー！」

そう言つと男はフーディンに命じた。

「テレポート！」

鳥子ヒカル ピカチュウ 5（後書き）

「」今まで田を通していただきありがとうございました。
実は本当に出そうかどうか迷っていたロケット団^{アニメ}。

参考資料のつもりでレンタルした映画やサイドストーリーの影響で
気付けば出すことを決めていました。

一応、世界が異なるのでアニメとはこれまた微妙に設定が違っていますが、基本は同じ、だと思います。

多分、ゲームに出てきた良く似たロケット団のほうです。ニャース
喋つてますけど。

そして相変わらず、ピカチュウとサトシが絡まない……。○ーン
プロットでは今回出会いはずだったのにどこで間違えたんでしょう。
おかしいなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9314o/>

トリッパーな父ちゃんは (ポケモン二次)

2011年7月4日16時45分発行